ざります」と血を絞る聲にて云ひ切り「神樣御意のまに〳〵爲させられませ」
一座は水を打ちたる如く靜かに、半七、源右衞門、治兵衞、秀司その他の者も、ひたりと其處に平伏しぬ
二十六日の夜は明けんとして、寒聲軒に弔せし豆殼に響き渡る
「きつとな、僞りは有るまいな」
「命を掛けて申上げまする」と善兵衞は詞に力を入れ「その代り家内をお赦し下さりませ」
善兵衞もまたかつぱと平伏す、其間に美伎子の顏は常となりき、美伎子の姿は原に歸りき、宛ら永き夢より覺めたる如く、神の座に座りて、怪しげに人々の樣を見詰めぬ
「お美伎さんお氣が注いた、天の將軍はお上りなされた」と源右衞門は云ひながら「恐しいことであつた」
「實に恐しいこと」と市兵衞は吐息して「このやうな物凄いお姿を見たことないお家樣苦しうございませぬか」
「何ともございませぬ」と美伎子は常の聲なりき、「何時の間にやら腰の痛も忘れたやうでございます」
「あなた苦しいことございませぬか、永の間神樣御憑らせ、お體疲れござりませぬか」と秀司は氣遣はし氣に云ふ
「いえ、いえ」と美伎子は我が身を振り返るやうに「何ともない、それよりはお前の足痛ちと御利益があつたかの」
美伎子は何事も知らぬなりき、その身の口より云ひたることを、少しも記憶せぬなりき
是れ實に秀司の足痛ありてより三日三夜を過ぎたる十月二十六日の朝なりき、神の心と、人の心と、融合一致して、その光りを初屋敷の一隅に見せたる最初なりき

(五)

「さてお家樣お身に障ることなうてお幸福でございます、この分なら明日ま

では必然御本腹でございます」

治兵衛も市兵衛も福住村の萩原も、源右衛門もおきはも其他のもの皆同じことを繰り返し繰り返して歸り行きぬ

美伎子は神の座より降りて後半日餘りをすや〳〵と眠り、未の刻目を覺まして、粥の上湯を少しばかり啜りたるが、再び枕につきてまた暫時熟睡みき。

其の夜も更けて時雨一時桃が野の山の嶺さより催し來たる

此時善兵衛は不圖夢より覺めぬ、二人ながら云ひ合したる如く、微暗き行燈の火に透かし見れば、奥の間に打ち臥しあり美伎子、さんばら髪振り亂して床の間の正面に平伏しありき、善兵衛も秀司も驚きて目を睜る

折柄天井にどつしりと重き物にても落る如き響したれば、二人は愕つと胸を冷して、高く見上げたれど、何事もなく床の正面に平伏しありし美伎子、大木の風に搖るゝ如くびり〳〵と身を顫はせたるが、

「え、え、國常立尊と仰せござりまするか、え、え、あらゆる人間を助けんがため、この世に降りて汝の身に宿ると仰せござりまするか」

善兵衛は秀司の袖をそと引きぬ、然も餘りの恐ろしさに聲はなかりき、秀司もまた目を皿の如くして沈と見る、美伎子は平伏したるまゝ身も動かさず、その樣深く神意に打たれたる如くぞ見えし、暫時くして

「え、え、」と耳を引き立てるやうにしたるが「國挾槌尊と仰せござりまする か、世界一列の苦痛を助けんがため此の土に御降りあらせられまするか、私の身に御宿らせござりまするか」

善兵衛はたゞ身の毛も戰立つばかりなりき、三日三夜食ず飲まず、神の座に立ちてありし疲勞の爲め、熱氣出でゝ譫言を云ふかと思へば然にも無く眞面目なりき、秀司は善兵衛の耳に口寄せ

「お母さま何をお云ひなさるのでござります、若しやお氣でも狂うたのでござりませぬか」

この詞の終らぬに美伎子はまた前の如く身を戰かしぬ

「は、は」と何物かに對して何事かを聞くが如く「豐斟渟尊でござりまするか、

大戸邊尊ございまするか、惶根尊ございまするか、面足尊ございまするか、
伊弉册尊ございまするか、伊弉諾尊ございまするか、大日霎尊ございまする
か、え、え、最期に出でさせたが月夜見尊ございまするか、十柱の御神世界
の人間を援はせられる爲め、此の土に御降りあらせられてございまするか、
え、え、此の十柱の御神を總稱して天理大神と申し上げるでございまするか、
天理大神私の身に御宿らせございまするか、さて惶れ多いことでございます
る、さて〳〵忝けないことでございまする、え、え、私の身を社となされて、
このゝち人間の苦痛を御助けございまするか、有難いことでございます」

美伎子は平伏したるまゝなりき、善兵衞と秀司は互に袖を引き合て、この
奇異の有樣に胸を打たるゝのみ、我が妻我が母のこの後何と成り行くかを懸
念して只太き息を吐くのみなりき

此後の美伎子は全く神の社なりき、姿は以前の美伎子なれど、心は以前の
美伎子ならざりき、性來の慈悲心は更に大きく深き廻轉を掛けて現はれぬ
「難儀をせよ、難儀を爲よ、難儀の底に落つるでなくば、神の心を知ること
が爲らぬ」

これ美伎子が口癖のやうに云ふ語なりき、彼女は慈悲善根を施すをもて、
人間第一の娯樂としぬ、然も身を守ること儉に、衣服は手織の木綿なりき、
食物は下女下男と同じ物なりき

第九章

（二）

美伎子は何時の場合にも慈悲の人なりき、何時の場合にも慈悲を捨てたることなかりき、美伎子は三味田の實家にありて、兩親の膝下に孝行を盡せし時より、絶えず慈悲善根を心掛けぬ、慈悲はやがて彼の女の生命にして、善根はやがて彼の女の魂なりき

四十一歳神憑りありたる後の美伎子は、更に深く慈悲の人となりぬ「難儀の極底に陥らずば、世界の道に分け入ること協はず、難儀せよ〳〵此の上もなく難儀せよ」と絶叫する彼の女は、人の難儀を外にすること能はざりき、村の中に極貧の者ありて、明日の糧に困ると聞かば、彼の女は米麥を持ち行きて與ふるを心の樂しみとしぬ、若し隣村に難澁のものありて、寒中に着るものなしと聞かば、我が着物を脱いで與ふるをも辭せざりき

されど限りある財産をもて、限りなき慈悲を行ふは、小さき池の水を吸み

出して、廣き田畑に注ぐと同じなりき、美伎子は米麥盡き金錢盡きて終に着物までに手を附けぬ、その身の晴着日常着を虛にして、秀司、お政、お春、小寒子の子供の着物までを賣り拂ひぬ、我が身我が子の着物悉く盡きたる後は、止むを得ず夫善兵衞の衣服にも手を附けん、彼の女の慈悲を行ふ前には我もなく人もなく、夫もなく子もなかりき

彼の女は原の美伎子と變ることなく溫順なれど、一旦これと信じたることを行ふには極めて猛烈なりき、極めて勇氣ありき、殊に慈悲善根を行はんとするとき、及び其のことを行ひ得たるに趣くとき凡て世界の何物をも辭せざりき、病者貧者の難澁を見て其の救濟を守り、夫の旨に違はざらんことを勉むれど、常には夫の詞に從ひ、夫の命令夫の詞をも用ひず、我が子の云ふことにも從はず、一度大慈善心湧き起るときはのまゝに成し遂げずば止まざるなりき、思ひ立ちたることを思ひ

萬一その行ひを止むるものあらば、美伎子はその日より障を見るなり、目、頭、喉その外の何れかに苦痛を感じて堪へ難く打ち臥すなり、美伎子の慈悲

善根は殆どその極に達したりき

初屋敷の中山家と云へば、藤堂侯の不足人にして、村の年寄役をも勤ひる家柄、此界隈にては五本の指に折らるゝ富者なりしが、美伎子の際限なき慈悲心は、忽ち其の大黒柱を危うくしぬ、貧は油斷なく中山家の門前を伺ひぬ、善兵衞もまた慈悲に富める善人なりき

人ありて金子借用を申し込むとき、善兵衞は一度も惡き顏したることなかりき、貸したる金に對しては遂に催促したることなかりき、期限に至りて先方より返却せずば、直ちに帳面に棒を引くを常としき、美伎子の如く此方より進んで慈悲を施こさねど、善兵衞の善根もまた家を富ますには緣の薄き方

なりき

「旦那樣、私着る物がござりませぬ」

小作人にても、地下の百姓にても善兵衞の前に泣きごとを云ふものあらば、善兵衞は持ち合したるを必ず與ふ

「旦那樣、私に着物を一枚下だされませぬか、近頃蚊が殖えてなりませぬ、

紙帳を一つ下ださりませぬか」

如何なる無心を云ふても、善兵衛は「諾し〳〵」と答ふるなり、否らじき顔を見せぬが持ち前なり

一方に美伎子の限りなき慈悲善根を控え、一方に利慾に薄き善兵衛を持てるなれば、中山家は見る〳〵中に傾きかけぬ、四尺前の倉は壁と柱と扉とを殘すばかり、内は悉く空となりぬ、幾町歩の田地は五七年の間に悉く年切り質に入れられて、他人の手に耕さるゝ運命となりぬ、年切り質は十年八年と期限を定めて、最も廉く先方の手に賣渡し、その期限内に融通つきたる時我が手に買ひ戻し得る賣買法なり、今の世に云ふ返り證文と同様なり

(二)

「こりや唯事ぢやない、美伎子さんどうせられたな」

第一に心注けたるは源右衛門なりき、善兵衛も美伎子が近頃の態度の一通りならぬに心配したる折柄なれば、太き息をほつと吐きて、

「私も慈悲は好きぢやが、お美伎のやうに際限なくては手に合ぬ、二三日前にも土藏を賣ると云ひ出して、一時私を困らせたわの」

「神や狐が魅いてゐるではあるまいの」と源右衛門は眉を顰めて「お前なぜ叱らつしやらぬ」

「叱つても肯くことではございませぬ、思ひ立つたことを爲らうとするとき、宛で人が擬つたやうでございます」

「それでも家には代へられぬ、何とか折檻なされませ」

「所が近頃不思議なことございます、お美伎の云ふことを止めますと、直ぐ病氣になるのでございます」

「はてな」

「此間も隣村の貧乏人に、私の着物を惠むと云ひます、澤山ある物なれば兎も角、二三枚の曝衣を遣られては困ると云ふと、美伎子の左の手が動かぬやうになつたのでございます」

「はてな」

「私もそれに慾いて着物を出して遣りましたら、見てゐる内に手が動くやうになりました」

「不思議ぢやの、虚見たやうぢや喃」

「虚のやうな信實でござります、爾う斯うする中、家中の者が元も粉も無くなるであらうかと思ふと、夜も寢られぬ程、心配でござります」

「矢張神樣がお憑きであらうか喃」

「若し神樣なら貧乏神でござります、神信心をして福を授かるのが世間幷でござりまするに、これは神樣のお蔭で、有る者を無くするのでござります」

「お前もとんだ災難でござりまするな」

「此のやうに困つたことござりませぬ、何うか助かる工夫はないものでござりませうか」

三人門前に立話しを爲せる時、土よりも青き顏、鶴よりも痩せたる身、杖に縋がりてとぼ〳〵と來かゝるは四十に手の屆く女なり、

「御免なされませ、活神樣は此方でござりまするか」

「お前誰ぢや」と源右衞門は愛想なく「何處からござつた」

「帶解のものでござります、此方のお家樣に御祈禱がお願ひ申したいのでござりまする」

「私の內は山伏ぢやない」と善兵衞は詞鋭く「間違て下さるな」

「此方樣でござります、初屋敷のお美伎樣此方に違ひござりませぬ」

「此の聲奧に聞こえたるらしく、美伎子は緣端へ現はれて、此方へお入りなされ、もうお出でぢやあろと思うて先刻から待てゐたのでござります」

「お、神樣、お助け下さりませ、お助け下さりませ」

女は大地にべたりと座りぬ

「此方へお入りなされ、お前さん何處ぞ惡いのか喃」

「長の病氣でござります、長の貧苦でござります」

「助けて進ぜる、此方へお入りなされ」

儼然して云ふ、その聲は美伎子にして、この調子は神なりき

「有難うござります」と女は幾度も伏拜みて「有難うござります」

今にも倒れかゝる身を、危く杖に助けられて、とぼ〳〵と裡に入る

源右衞門政右衞門善兵衞は顏見合せて、門の蔭より美伎子の爲んやうを見てありき

美伎子はまづ女を緣端に腰掛けさせぬ、奥より溫き粥を持ち來りて薦めぬ、

お春は實にその給仕人なりき

「彼でござります、あの通り際限のない施興をするのでござります」と善兵衞は顏を蹙めぬ

(四)

「お家樣有難うござります、お蔭さまで空腹いのが助かつてござります、然しまだ身體の痛みは去きませぬ」と女は美伎子に甘へる如く云ふ「何うぞ拜んで下さりませ」

「いや〳〵、拜んでも可けぬわの、神樣は拜むものばかりに幸福は下さりませぬ、お願ひなされ、眞心籠めてお願ひなされ、お願ひをする前に、お前さんの心をすつきりと改めるぢやぞ」

女は美伎子の云ふことを十分に解し得ざりき

「お家樣何を仰せでござります」

「心に汚れがあつては、何れ程お願ひなされても、神樣横を向いてお在でなさるで、先づ心を綺麗になさるのぢや」

「心の汚れと申しますると……」

「心の塵芥ぢやわの、お前さん病氣があるといふも要りがそれぢやわの、病氣は人の身の障りぢや、神樣がお前の心に塵の積つたを、それとなくお氣注け下さるのぢやわの、親兄のある人は親兄が氣を注ける、親兄のない人は神樣が御心をお注け下さる、その御恩の深いのを知つたら、少しも早く心の塵芥を拂はねばならぬわの」

「心の塵芥と申しまするとい……」

「罪ぢやわの、人に生れて人の行ひをせぬ罪科ぢやわの、お前さんこれまでに悪いことした覺えないか、道に外れたことした覺えないか、有るぢやわろ、心の塵芥が身に浸みてあるぢやわろ、それが病氣の根原ぢや、その塵芥拂はつしやれ」

美伎子の詞は黄金の針が一つ〳〵に光りて、女の胸を衝く如く險著なりき、女は頷首いて詞なし

「何うぢや覺えはないか、罪科と云ふても人の物に手を掛けるばかりぢやない、他の體に害を及ぼすばかりぢやないか、此方貪慾をした覺えないか、此方他の物に思ひをかけたことないか、人を瞋んだことないか、人を咎んだことないか、物をほどでもないことに腹を立てたことないか、驕慢たことないか、人を侮つたことないか」

と美伎子は畳みかけて問ひかけぬ

「皆ござります、私ほど慾の深いものござりません、相應に暮てゐた頃は人を侮つたことも瞋んだこともござります」と女の詞に懺悔の光り現はれて「私は神樣の御罰が當つたのでござります」

「思ひ違ひをしては爲らぬ、神樣は御罰をお當てなされぬが、自分と自分の心から罰を當てるのぢや」と美伎子は高く大空に輝ける星の光りを仰ぎ見る如くしつゝ「如何に怒り腹立ちても我が子の上には愛がある、親の首に繩を附ける不孝者でも親の心では助けたいが一杯ぢや、神樣のお目からは人間が皆小供、假令道に外れたことしても、助けて遣らうと思し召しこそ爲れ、罰をお當てなさる筈はない、お前さんそのわけが分らぬか」

「御尤もでござります、私のやうな不所存者でも、神樣のお手に拔はれるでござりませうか」

「原よりのこと、お拔ひが無うてなんとせう、人間の體は神樣がお作りなされたものぢや、神樣から云へば貸主、人間から云へば借り人、神樣の物なら大切に用ふ筈を不束な人間が勝手次第に取り扱ふで、時々に損じがまはる、心は自分の物、體は

神さまのもの、神樣の物は丈夫でも、道ひ方が悪いと破損する、病氣の因はこれぢや」

「お訓し有難うござります、お蔭で心が晴れ〳〵と致しました」

「由て悪いことは云はぬ、氣を注けて心の塵芥をお拂ひなされ、自分に悪いと心注いたら、神樣にお詫をなされ、お詫をして一生懸命にお願ひなされ」

美伎子は諄々として說き訓す、門の木蔭に佇みて、この詞を漏れ聞たる三人は、神の光りに打たれたる如く憮然たり

(四)

彼の女は心より懺悔しぬ、心よりの懺悔は彼女をして胸の有也無也の幾分を拂はしめぬ、今まで垂頭勝に見えたるが、今はきつと頭を擡げて、清しき聲に應答へするやうに爲りぬ

「お前の樣な貧窮人が、滯解界隈には澤山あらうの」

美伎子は改めて訝く問ひぬ、人にして神なる彼女は、人間の窮苦を有る限り救ひ取りて、美しき神の光りを浴せんと希へるなり

「數限りも無くござります、中には明日食ふ米も無うて、人の軒端に立つ者さへござります」

「不憫さうぢや、聞き捨てにはされぬ、私の食扶持を減らしても、力の及ぶ限り扶けて進ぜたい、お前難儀な衆を伴れて下さらぬか」

「え」と女は聞くまじき事を聞きたる如く驚きて「村の貧乏人を殘らず伴れて來るのでござりまするか」

「私の力の及ぶ限りを扶けます、伴れて來て下されの」

「有難い事でござります、お家樣の有難い思召しを聞いたら、貧乏人は皆な蘇生るでござります」

「人は難儀のどん底に落ちぬと、難儀の道筋が分らぬ、難儀の底には神の光りが輝いてござるで喃」

「その難儀をお助けでござりまするか」

「皆助ける、世の中の米も金も、要りは神樣からお預り申してあるぢやで、

難儀な者に施すは、神様のお手へお返し申すも同様ぢやわの」と美伎子は儼然云ひたるが「私も八九年以前、目欲いものは悉く賣り拂ふたが、まだ家屋敷が殘つてゐるで、今度はそれを援ひの爲めに出さうと思ふわの」

「えゝ、お家様、難儀な者を助ける爲めに、お屋敷までをお賣り遊ばすでござりまするな」

心なき女乞丐も、美伎子の眞心に動かされて、滂沱たる涙はら〳〵と襟を傳ふ

「援ひの爲めには血も絞る、私が不自由を堪へる爲に、一人の人でも助かれば本望ぢやわの」

「お家様は神さまぢや、生きた神様で在らせられます」

と女は縁端に平伏しき

「これ〳〵」と聞きかねて門口より呼びかけたるは善兵衛なり「私の家内は狐憑きぢや、何を云ふかも知れぬ、眞に受けて下さるな」

「實に善兵衛どの云はせの通りぢや、何處の國にか家を賣つて施しをする愚者があらうぞ」と源右衛門も内に入り「よい加減に聞いておかつしやれ、此處の家内ちと氣が逆上て居られるやうぢや」

「へい」とばかり女は續く詞なかりき

「お前様、神様の詞疑うてはなりませぬ、この方々何をお云ひなされうと、耳を塞いでお出でなされ」と美伎子は犯し難き威を見せて「もうお歸りなされませ、今言ふたことに露ほども偽りござりませぬで、二十日過ぎこの家にお越しなされ、お前の心が信實であれば、神の助けが必然來ます」

「有難うござります、有難うござります」

女は幾度か禮を陳べていそ〳〵と歸り行きぬ、前に當家へ來りたる時とは變りて、痩せ衰れたる顔に、一道の生氣見えき、善兵衛はその後を見送りて

「お前甚いことを約束したの」

「神様のお心でござります」と美伎子は諦めたる如き聲「お許しを願はねばなりませぬ」

「神様のお心でも家を賣ると云ふがあるか、施しに家を賣つて何とする」

「私の自由にはなりませぬ、何事も皆神様のお指圖でございます」
「情無い心になつた、お前それで」と善兵衛は涙さへ流して「庄屋様もお出でぢや、政右衛門も來てゐる、それで一家の妻と云へるか」
「お恕し下さりませ、神様の仰せ付けは私の心で何うすることもなりませぬ」
「神様が其様なことを仰せられる筈はない、お前狐が憑いてゐるな」
源右衛門は聲を勵ます、美伎子は再び何事も云はざりき

(五)

「家を賣て下され、家を毀つて下され、神様の仰せ付けでございます、少しも早く家を賣て下さりませ」
美伎子は重き枕に打ち伏しながら、同じことを繰り返し〳〵いふなりき
彼女は今日までに其の身の衣服調度はいふに及ばず、秀司の物、お政の物其他子供の物まで、悉く賣り拂ひて慈悲善根を事としき、されば庄屋安達源右衛門に次ぎて、屈指の身代に數へられし中山家も、今は見るかげだになく

零落れて、四戸前の土藏の跡には青き草生ひ繁げり、蟲の聲々憐れに秋風間なく吹き渡り、幾町歩の田地田畑は悉く他人のものとなりて、青き田、黄色き稲皆彼方を向いて繁りぬ、跡に殘りしは家屋敷のみ、しかも美伎子は今その家屋敷を賣らんとて、良夫及び親戚の人々に迫りをれるなり
「これ〳〵お前そのやうな無理を云ふてはならぬ」と善兵衛は困じ果てたる顔色「外ならぬ神様の仰せといふに、據なく聞いて居れば、際限もなく無理難題を云はつしやる、如何に神様の仰せでも御先祖から傳へられた大切な寶を、人手に渡されう筈はない、着物や田地とは違うて此の屋敷には御代々々の魂が罩つてゐる、これを人手に渡すことあつては私の身が立たぬ、お前が何んと云はうともこればかりは賣られぬ」
と善兵衛は頭を振る
「家を賣て下さりませ、家を賣たお金で難儀な者をお救ひ下さりませ、お願ひでござります」
美伎子は何事も耳に入らぬらしく、その身の思ふことのみを云ひ續く

「何を云ふてもこれぢや」と善兵衛は泣きも出したき様、源右衛門を見返へり「どうしたものでござりませうな」

「私もこれには閉口ぢや」と源右衛門は頭を掻きつゝ、美伎子の枕元に膝行寄り「お美伎さんやお前の云はつしやるのに無理もないが、少しは善兵衛さんの身にもなつて見しやつしやれ、多くの親類衆もお前の仕方に愛想をつかし、お前に命を救はれた伜の源四郎（照之丞の改名）さへ、お前には手を置いて、狐憑と悪口する程ぢやもの、世間の人は何のやうに云ふて居るか分らぬ、お前ばかりでは無い、善兵衛どのばかりでは無いお前が亡夫婦が目を瞑られた後には、秀司どのも居られる、お政どのお春どの小憲どの大勢居られる、百姓の身には第一の寶といふ田地田畑を人手に渡して、その上又家屋敷を賣り拂ひ、大勢の小供衆が何を以て立つて行かれる、お前貧乏人の世話をする暇に、何故小供達の世話をさつしやれぬ、お前の慈悲善根——お前の神様にお仕へなさる、その眞心の十分一を小供衆に注がれたら、一家の中は安泰ぢや、假にも人の妻、人の母と呼ばれる身で、家屋敷

を賣れといふ、その様なことが何處にある、私は源四郎の命を援はれた大恩を報ふ爲めに、こんな苦い口も利くのぢや、これば、かりは止めさつしやれ」と源右衛門は熱心なりき

「家を賣つて下され、家を賣つて下され」と美伎子は其事のみ云ひ續け「あゝ、頭痛がする、あゝ、胸痛みがする、神様私の心をお攻めなさる、早く家を賣つて下され、早く金にして下され、明日の昼には難儀な人が大勢押しかける、その人達に一合の米でも恵まずば神様のお心に外れまする、早く賣つて下され、早く賣つて下され」

囈言にもあらず、現にもあらず、美伎子は一心に頼み云ふなり、秀司は母の苦しみ悶ゆる様を見るに見難ね

「もし、お父様あのやうにお苦しみなされます、お母様お一人の思召しなら、お止め申す口上もござりますが、神様の仰せとあれば致しかたがござりませぬで、お詞の通りに家を賣つて下さりませ、家屋敷は買戻す時節もござりまする、お母様の身に萬一ものことござりましては取り返へしが付かぬのでござ

ります」

「まことにさうぢや、私もそれを思はぬではない、先祖から傳はる家屋敷を惜む爲め、お美伎を見殺しにしたと云はれても片腹痛い、家の爲ぢや、屋根の瓦を一二枚剝つて見るか」と善兵衞も我を折りたる聲なりき

「爾うなされませ」と秀司は直に同じて「爾うしてお母樣のお身體に驗が見えたら、やはり神樣の命令と思ふ外ございませぬ」

(六)

「是非に及ばぬ、それでは私が屋根に上る」

善兵衞は自ら屋根へ攀ぢ登りぬ、夕陽力なく甍を照らして、北風寒く棟を吹く間、善兵衞は庇の瓦を二三枚取りて、庭の中へ投げ捨てぬ、この非常の行爲、やがて名醫國手の藥にも優りて、不思の驗は現はれぬ、美伎子は頭痛も鎭まりて、むく〳〵と起き上る

「有難うございます、お蔭で私の身も助かります」

曾て美伎子が五重相傳を受けたる時、新らしく仕立てたる白綾の小袖は當時の紀念として此時までも祕藏せられぬ、身に着く物一切を賣り盡して、貧き者を助けたれど、この小袖のみは捨て難ねて、納戸の中に藏め置かれき

夜は既に更けて、雪催ひの風の音淅瀝と軒を打ち來たる、一穗の寒燈消えんとして消えず、寒さ劍の如く緊々と逼り來る間、善兵衞は美伎子の前に膝をつゐて、

「お前この小袖を着てくれ」と突然に云ひ出でぬ、美伎子の周圍には源右衞門、半七、秀司、お政、ずらりと幷びて、さも物々しく控へたり

「思ひ掛けぬ、斯樣な物、何の爲めに着るのでございます」

「兎も角も着るぢや、私が命ける」

良人の命とあなに拒みかねて、美伎子は三十年來手を通したることなき、白綾の小袖を着たりき、されど合點行かず原の座に座わりて

「斯うして何う致すのでございます」

「どうもせぬ、お前に云ひ聞けることがある、まづこれを見」と善兵衞は云

ふ中に傳來の一刀をすらりと抜きて、露も滴たるばかりの尖頭を美伎子の前に突き出しぬ、「狐憑ならば退け、本性ならば悔ひ改めよ、どうぢや」

「私狐憑きではござりませぬ」と美伎子は儼然たる態度、刀物も恐れず、兩手を膝の上に置きたる儘なり

「さらば本性で斯やうなことをするか、良人や子供が路頭に迷うのも厭はず、際限のない施するか、親類緣者が苦勞心配するを氣の毒とも思はず、家屋敷まで賣らうとするか、直ぐ本心に立ち返へれ」

「私、物好きに致すではござりませぬ」

「さらば何のために斯様なことをする、此のまゝに捨て置けば、一家の者住む家もなく、乞丐の境界に落ちねばならぬ」

「不自由はさせませぬ、難儀のどん底には神のお扱ひがござります」

「お前は何かと云ふと神々と口癖に云ふが、お前の云ふ神は貧乏神ぢや、人の寶を滯のうちに捨てさせて、私や子供を困らせる魔神ぢや、何の幸福をお與えなされう、速に立ち去れ、狐ならば速に立ち去れ」と一刀の尖頭を美伎

子の胸元に突き出したれど、美伎子は驚きたる樣もなく、また瞬ぎだもなさざりき

折柄外に「狐憑あアい、中山の狐憑きあアい」と口々に罵り叫ぶ聲したり、秀司の目には無慈の涙露と滾ふ

「お美伎さん」と源右衞門は膝を進めぬ「お前の耳に彼の聲が聞こえぬか、村の者大勢が門口に集つて、狐憑々々と惡口する、お前彼を聞いて口惜いと思ひなされぬか」

「神樣にお目がござります、その中には人間も目を開きます」

「お前は小供可愛いこと無いか」

「小供は可愛うござります、家も大切でござります」と美伎子は聲を慄はせて「然し、その爲めに神樣の仰せを背くことは能きませぬ」

「半七さん」と源右衞門はうしろを見て「いつも此でござります」

半七は早や六十を過ぎて、髮も髭も皆白かりき、子ゆゑの暗に肉も落ち、此頃よりの心配に姿も衰へて、聲も又嗄れ勝なり

「お美伎、お前情ない身になつてくれたのう、お前がこんな事をして呉れるので、私は善兵衛どのに面目ない、どうぞ本心に立ち歸つてくれぬか、私や小供を助けると思つて、本心に立ち歸つては呉れぬかの」

美伎子は父の顏を沈と見て、さめ〴〵と泣き出しぬ

「お父樣、堪忍して下さりませ、皆さまのお心は善う分つて居ります、然し私の身體は私の自由に爲りませぬ、堪忍して下さりませ〳〵」

善兵衛は一刀を提げたるまゝ、云ふばかりなき悲みに打たれたり、屋り騷ぐ村民の惡聲も、次第に遠くへ消え行きて、軒を饒る松風の音のみ高かりき

(七)

何時の間に降り積りしとも知れず、野も山も一面に白銀を布き詰めて、枯木に花咲き、軒に水晶の枝參差たり

中山家は美伎子の乞ひ望むがまゝに、母家は悉く取り毀たれて、今は隱居所を餘すのみ、それすら壁の骨陽に庇の破れより雪吹入りて、襖に畫きし墨繪の松も今日ばかりは白く見えぬ、美伎子は髮も亂ろに身も痩せて、見る影もなく窶れたるが、雨戸の間より拔け出でゝ、素足のまゝ庭先に下り立ちぬ、雪は霏々として骨たちたる烟を打てど、彼女は知らざるが如く手を合せぬ

「お赦し下さりませ、私好んで家屋敷の仰せ付け據無く皆樣に御無理御難題をお願ひ申すのでござります、家の物を悉く賣り拂うては、旦那樣や子供が難儀するのも知つて居ります、然し神樣のお詞に從はゞ、旦那樣や秀司の難儀を思はぬに當ります、旦那樣や秀司の詞に從へば神樣の仰せに背かねばなりませぬ、私の體一つで神樣と旦那樣と、雙方にお仕へ申さねばなりませぬ、此心の苦しみを誰に告げる人もなく、日毎に思ひ窶れて參ります。所詮私が在りましては、當家の立ち行く筈ござりませぬ、私斯うしてあればこそ、神樣のお詞も下ります、私の身を無きものにすれば當家は安泰、神樣の御罰を受けることもござりませぬで、これ今生のお暇乞ひ、私今夜のうちに身を投げて死まする、貯池の藻屑となります、さらばでござります、秀司もお政もお春も小寒も、お父樣を大事に一生懸命

精出して、私が人手に渡した田地田畑を取り戻して、昔の立派な身代に盛り返へすぢやぞ、お前等の身は草葉の蔭から守る、何時までも永生きして下されや」

されど一滴の涙も持たざりき、彼女は深く観念する所あるが如く、三寸餘りも積りたる雪道を一足抜きに辿りて、かきくらし降る雪の中を逸散に貯池の方に急ぎぬ、彼女の命は降り積る雪よりもなほ早く消ゆべし、池の汀には枯れ蓬淋しく立ちて、風の吹き到るごと雪を拂ふ、池の面は厚き氷張り詰めて、水鳥の床も凍る、時は丑満を過ぎて草木も寐り水も眠り、家も稲村も野も畑も、悉く眠りてある中、雪吹く風と美伎子とは眠らざりき、美伎子は池の汀に佇みて、神々の御名を呼ぶこと数十度なりき、神の命を果さずして今此處に命を終る、止むを得がたき成り行きとは云ひながら、口惜しさは何に譬へん方もなく、生き替り死替りやがて望みを果すべき心の誓ひを立つるなりき

「善兵衛どのさらばでござります、私に親切をお運び下された庄屋様、政右衛門、萩村様、勝田様其他の皆様おさらばでござります」

云ひはてゝ在り合ふ大石を池の表に投げ付けぬ、氷の割れたる間より身を投げん覚悟なりき

美伎子は兩の手に量り難き力ありき、殊に彼れの指先は大の男も及びがたき力ありき、彼の小指と示指との間に挟まれては、如何な善兵衛も振り解くことなしかねき、彼女は此處に死所を定めんとして、まづ大石を投げたるなりき、石は氷に當りぬ、雪粉々と亂れ散る間、四五尺あまりの氷は砕けて、ばつと立つ水煙、露は小き玉と凍る、美伎子は其處より身を投ぐべくづかづかと駈け寄りしが、雪にや滑りたる、風にや吹かれたる、將、神の御手に加護ありて後よりや引かせたる、宛ら枯木を倒す如くばたりと倒れて、暫くは起きも上らざりき、彼女の倒れたる間にも雪は止み間なく降り續きぬ

暫時してがばと刎ね起きぬ、起きて再び池の面に行かんとしたるが、足竦みて一歩だも歩み得ざりき、寒氣のために自由を失ひたるか、抑々また神の御心ありて、彼女の死を止め給ひたるか

「死ぬこともなりませぬか、死んでこの苦限を遁れることもなりませぬか」
雪の堤に身を平伏して正體も無く泣き入りぬ

(八)

雪の間に泣き伏して、一二晌を過ぎたるなれば、美伎子もし普通の婦人ならば、凍えても死ぬべきを何の障ることもなかりき、彼の女はつく〳〵心に考えぬ

我身は婦人、殊に纖弱き女の身を以て、良人、實父、庄屋殿、有らゆる親戚の方々に苦勞心配を掛け奉る、なにとも罪深き業なり、我身は神の仰せ止むことを得ず、良人の言葉に背きて、限りなき施興を爲すなれば、人の狐憑と悪口するも無理ならず、良人が白及をもて迫りたまふもその謂れあり、されど我は狐の爲めに心を亂さるゝほどに弱き女にはあらず、一時の出來心に驅られて、良人や我子の難儀を顧みぬほどに愚なる生れにはあらず、正しく神の命に由りて、神の御心を行ひ奉るなれど、善兵衛殿この事を察し給はず、萬一の事ありたる時は、非業の死に命を失ふも止むを得ず、運命止むを得ずとして諦むべきも、それが爲め善兵衛殿に殺人の名を負はすことありては爲るまじ、われは良人が憤懣の及に仆れ、良人は罪を得て牢獄の人と爲りたまふ上、後に殘る小供の身は什麼となるらん、良人の身に過失の無き間、我身自ら身を捨てん事、一つは良人の爲め、一つは家の爲め、又一つは小供の爲なり、神と良人との間に挟まりて、何れに從ふ由も無き身を處するは此外無し、われは死なん、死して再び世に迎えらるゝ時を待たん

雪は已に竭みて、雲の破れよりさやけき殘月の光り漏れぬ、飢えたる獸の遠き山に鳴き、寒さに堪へかねて羽叩きする塒の鳥、たゞ寂寞を破り來る

美伎子はすつくと立ち上る、雪後の月は清くその半面を照らしたり

いや、いや、一歩の道も踏み違へる時にはあらじ、われは神の命を受けて神の御心を行ふべき身の上なり、われ死なば誰か亦神の攝理を爲し得べき、われこゝに命を終らば、この濁りたる世に立ちて、誰か亦神の道を行ふべき、われの最初の覺悟は、家を捨て、良人を捨て、我子を捨てゝ、身命を大神に

捧げ奉るにありき、世を常暗の中より救ひて、目前に甘露臺を築くにありき、人を浮世の波の底より助けて、天の道を得さするにありき、濁りたる世を清うするにありき、病みたる人を健康にするにありき、われは肉體の人にあらずして、心の人なり、この勇猛の心をもて、世の荒浪と闘ふが天分なり、將た神命なり、家を思ふは私の人情、天理を奉ずるは神の託宣、輕々しく捨つる命にはあらず

彼女は又斯く思ひ返して、皓々と照る月に對しぬ、皚々と白き雪に包まれぬ

まことに彼女の心これ月なりき、まことに彼女の身これ雪なりき

一たび思ひ返したる彼女の心は大磐石なりき、一たび斯うと覺悟せる信念は泰山よりもまだ重かりき

彼女はやがて急ぎ行く時に比べて、その足は輕かりき、家に歸りぬ、死を決して家に歸りぬ、白き雪道は宛ら天理の大道もて築き爲したる如く消く且つ正しかりき

第拾一章

（一）

貧苦いよ〳〵迫りて、美伎子の信念はいよ〳〵堅かりき

一面に於て狐憑狸憑と惡口譏謗するもの多きと共に、一面に於て美伎子の廣大なる信念に服するもの少からざりき、彼女の身に神憑ありて後數年、何處より來るともなく、誰より傳へられしとも無く、中山家へ來りて美伎子の祈禱を受くる者、日ごとに三五人づゝはありき、五年十年を經るほどに、十人二十人、多き時は三四十人を算する事もありき、然も美伎子の祈禱を得たる者は、不思議に病氣全快するなり、いかな惡疾難病も、美伎子の誠ある諭の下に、快癒を見ぬはあらざりき

これ美伎子の熱誠、相手の心に感ずるなり、熱誠感じて惡魔を驅除退治するなり

病氣あるもの、初めて美伎子に歸依し、美伎子に歸依するもの、必ずその

恵を受け、遂に熱心なる信者となるが爲め、美伎子は人々の病氣に罹るをもて「障害」と稱し「障害」に由りて、我前に來るものを「お手引き」と云ひき、故に彼女は祈禱と云はずして「手入」と云ひ「さはりも結構、神は身體についてお手引きあらせらるゝ」と說きたり

彼は此間も又施與を事としたりき、極難の者を見れば、その身の食ふ物を割きても與へぬ、その身の着る物を脫ぎても惠みぬ、然も彼女は秀司を始め三人の娘に諭して

「難儀になれ、難儀になれ、難儀せぬと難儀が分らぬ」と云ひぬ

これ美伎子の大主意なりき、難儀せよとは祖先傳來の財產に賴る事なくして、各自自活の道を立てよといふなり、神聖なる勞働に由りて得たる貨金を神聖なる生活に費消せよと云ふなりき、彼女は徒手徒食の輩を憎むこと蛇蝎の如くなりき、然も自活の道を得んとするは、身自ち難儀困究のどん底に陷るにありと訓るなり、父祖の遺產に賴る者は、自力自活の味を知らず、自力自活の道を知らざるもの、爭で人間と云ふを得んといふ、これ彼女が若き時よりの主義なりき

故に彼女は家產の總を施行慈善に擲ちて、少も吝む所あらざりき、家を毀ち、田地田畑を人手に渡しても、確としたる此身此心だにあらば、自己も家族も飢渴に苦むこと無しと信じたりき

されど善兵衞は美伎子の本意を知らざりき、何とかして妻の所行を矯め正さんと苦心するほど、嘉永六年二月二十二日の夜、病氣の爲めに逝去りき、美伎子此時五十六歲なり

遠く人間の境は脫却したれど、美伎子の半面は尙人間なりき、四十年來伴れ添ひて、數々の苦勞を掛けたる良人、壯き時には多少の過失ありたれど、尙善人と呼ぶを得べき良人、我身の慈善行爲につきて、さま〴〵故障は仰せつれど、甚しき防害を爲されざりし良人、溘然として逝きたるなれば、美伎子は哀別の情に堪へざりき、三五日の間は引き籠りて、後生安穩を祈禱したりき

美伎子やがて美伎子の身に憑らせたる神々の大誓願は、天理の大道に由り

て世界一列を救ふにあり、常暗の世に泣き明し泣き暮らし、悶え惱み、苦み煩く、多くの人間に安心の基を與うるにあり、此の大誓願の前には良人の死別も無く、將た愛子の困難も無し、美伎子は雙手に涙を拂ひて、決然と神の座に着く、美伎子の德を慕ひ、美伎子の廣く大きなる慈愛の前に跪づきて、心の救助を求むるもの引きも切らざりき

前には飢渇を救はれんとして來れるもの、今は心を救はれんとして來る、美伎子は物質の人より漸く心靈の人に進めるなり「慈悲深きお家樣」として見たる人々も、今は「貴き神樣の御社」として尊敬するに至りぬ

美伎子六十に達したる頃より、信徒は數を增し來りぬ、遠きは紀伊丹波攝津播磨の國々より、近くは和泉河內、大和の內にも、郡山三輪櫻井など最も信者多かりき

（二）

美伎子の家は當時貧の極に達しき

身を切る如き寒き風は、桃か野の山の頂よりおろして、荒れ果てたる中山家の屋敷中を吹き廻る、燈油を買ふ餘裕もなければ、美伎子は庇漏る月を燈火に、今宵もまた絲を紡ぐ、身に纏ふは垢づき敝れたる布子、幾條も霜を抽んずる髮を無雜作に取り上げて、朝は曉の風凍るが如き時より、夜は月の光り西に傾きて、絲車の手元見えずなるまで、片時も息を休めたる事無し

「お母樣、お寒くはござりませぬか」

絕えず母の側に在りて、母の總を手助けするは小寒子なり、手を溫むる火もなき憐れさは、兩の掌に熱き息を吐きかけつゝ、疎末なる竹籠に枯木枯芝を容れたるを肩にして出で來る、美伎子は見て

「先刻から姿が見えぬ、何處へ行たかの」

「お母樣お寒からうと存じ、春日のお社へ枯木拾ひに參りました」

「それは大儀であつた、然し私は寒うないし、人を救ふ爲に働くものは、養えるやうな血が身の內に湧いて居るで、風ぐらゐは何とも無い」

「こゝで燒火致します、すれば少しは私の志も屆きます」

縁の缺け損じたる陶製の圓火鉢は、當座の爐なりき、小寒子はその中へ枯木を積みて、焔々と焼き初めぬ、神に齊しき美伎子の在る周圍は、忽ち紅き焔、白き焔に映じたり、頽れたる縁も骨の露になれる壁も、齊しく火の惠みに彩れぬ、寒氣は消えて、心からの溫情は自然に湧き出でたり

「兄さまはまだお歸りでござりませぬか」

「明日のお米が無いと云ふて、先刻丹波市へ薪賣りに行たが、まだ歸つて來ぬやうぢや、甚う手間取る」

「兄さまも御苦勞を爲されます」

小寒子は面を背むけて、頬に傳ふ一雫の露を拂ふ、美伎子は斯る困究の底に落ちても、恨み悲む樣は無く平然たり

「これほどの事を難儀と思ふては爲らぬ、世にはまだ難儀の淵に沈んで居る人がいくらもある、その人達に比べると、私等の境遇は結構ぢや、第一身體に障りが無い」

「身體に障害の無いは、千萬兩の富でござります、此の樣な結構なことはござりませぬ」

折柄表口に、霜を踏む草履の音して、負子を肩に歸り來りしは秀司なり、着る衣服なければ、これぱかりはと今日まで殘し置きし紋付の着物を着て、明日食ふ糧を得べく丹波市へ薪を賣りに行きたるなりき、朝早く起き出でゝ、手づから近所の山に樵せるを、殊勝にも肩にして在より町を賣り歩けるなり

「兄さまお歸りでござりまするか、甚う遲うござりました」

「やつと米を買ふて來た」と秀司は負子を破れたる壁に立てかけ、一二升はども容るべき米嚢を美伎子の前へ出して「お母樣、遲うなつて澁みませぬ」

「今日も商賣は出來たかの」

「やつとお米に有り付いて參りました」と云ひながら天を眺めて「もうお休みなされては何うでござります」

「まだお月樣がお在ぢや、それに小寒が燒火して呉れる」

「お勞れはござりませぬか」

「人間に難儀は無い、難儀と思ふのは神の心を知らぬのぢや」

もじこゝに難澁の者ありて、美伎子の袖に縋り付かば、秀司が得來れる粒粒辛苦の米の幾分を頒ち與うるを辭せざりしならん
彼女は斯る生活に入りながら、絕えて難儀を說く事なかりき

(三)

六十を過ぎたる美伎子は、一刻として身心を休めたること無く、壯き者の三四日分を一日の中に働きたり、人の爲めに縫針もし、又人の爲めに機を織りき、村の兒女多くを集めて、月漏る軒に裁縫の道を敎へたるも當時なり、子息秀司が村の童を集めて、習字素讀を敎へ授けたるも當時なり、長女お政二女お春、何れも皆な他家へ緣付きて、美伎子の側にあるは秀司と小寒子とのみなりき

美伎子の所謂、自己の力に由りて、記憶せよ、斯くの如くにして得られたる貨銀の大半も、亦その八九分までで慈悲善根に施し盡さるゝを、月の前に機を置きて、清き輝りに光澤を添へら

る、絹反物の機賃は、美伎子自身の寒を凌ぐ料ともならず、小寒子が髮飾の補足にもならず、皆な貧民の施與に充てらるゝなり、故に美伎子は幾年經ても貧苦なりき、秀司が日ごとに寺子を集めて、粒々辛苦の中に字を敎うるが謝儀束修も、その大部分は施し金に使はるゝなり「こうだお助け下さりませ、明日のお米もござりませぬ」と、地上に平伏して、憐れを乞ふものある時は三度の食を廢しても、必ず救の手を着けるが例なりき、假し自家に明後日の用意無くも、明日の糧を取り出して慈善するが例なりき

手に絲を紡ぎながら、手に機を織りながら、手に縫針を續けながら、信者信徒の來り訪ふごとに、神の意に由る說諭を爲すを勤めとしき

見る影もなく荒れ果てゝ、庭には露草滋く茂り、庇には雨漏りて、人の住むとも見えぬ家に、日ごと機織る音、道を說く聲を聞かざる無し、布留野の川に水の響き聞こえぬ時ありても、中山家の門內にこの聲この音を聞かざるはあらざりき、眞にこの說諭こそ美伎子の精神にして、又人々心の綱なりき

(四)

今日も又五七人の信者信徒は、美伎子の周圍を取り巻きて、一圖に說論を聞き居たり、美伎子は村人より頼まれたる絹物を裁縫ながら

「理は八方八面ぢやぜ、何方からも正面に見らるゝぜ」

辻忠作、中田義三郎、山中忠七、大東重兵衛等の古き信者は當時より美伎子の前に侍坐してありき

「理は神ぢやぜ、よいか、理は神ぢやぜ」

辻忠作は身を進めぬ

「親樣へ伺ひます、親樣の敎は什麼と申すのでござります」

信者信徒の人々は、美伎子を親と冊くなり、美伎子を親と冊きて奉養を怠らじと勤むるなり、放に美伎子と信者との間は、極めて圓滿、極めて平和、極めて親く睦じかりき

「天理の敎へぢやぜ、天理は神の御差配ぢやぜ」

山中忠七も又口を開きぬ

「何日かも天理の理をお聞き申したことでござりますが、然し今日は新來の人々もござりまするで、もう一度御敎授を願ひます」

「草木は神がお作りなさるぢやぜ、草木の蓁々と繁り榮えるは天の理が行はれるぢやぜ、人間は神がお作りなされたのぢやぜ、人間が世の爲めに動き働き、朝廷樣へは忠義、先祖親へ孝行を盡すは、皆な天理に由るのぢやぜ、天理に逆ふては樹も繁らぬ、忠孝を忘れては道が立たぬ、私はそれを說いて聞かせるのぢやぜ」

「神樣にも色々ござります、種々のお名がござります、これは什麼の爲でござります」

「草木も一樣では無いぜ、松もあれば杉もあるぜ、人間も一通りでは無いぜ、男もあれば女もある、世界の物體も一個には限らぬぜ、海もあれば川もある野もあれば山もある、けれどその御利益に二はない、その御靈德に二はないで、十柱の神を一に集せて、天理大神と崇め奉るやぜ」

「神も天子様も同じことでござりまするか」
問はつぎ〳〵に起り來る、美伎子の答へは宛ら響きの物に應ずる如く速かなりき
「神は天を御差配、お天子様は國土をお治めぢや、お天子様は神の御末ぢやぜ、此土に臨ませたまふは、やがて神の命を享けて在らせられるで、お前達は神様を崇め敬ふと同じやうに、お天子様へ忠義を盡さねばならぬぜ、これが誠の忠義ぢや、これが神様へ御恩返しぢや」
美伎子が天理天道を語る間、自然と詞に力ありき、聞く者皆な襟を正さぬもあらざりき
「親様へ申し上げます」
此時一人の信者は美伎子の前へ進み出でぬ
「什麼ぢやの」
「お手入を願ひに來た人でござります」
「何處から來せた」

(五)

「樺本村（大和國山邊郡）の飯降伊藏と申します」
「をゝ」と美伎子は兼てその名を聞き知り居れるが如く「待つて居た、すぐ逢はうぞ」
伊藏は三十五六の立派なる男なりき、木綿の着物に、小紋石持の羽織、美伎子の前に平伏して
「お助を願ひます、家内が産後で惱んで居ります、醫者も手を放して、今は最後を待つばかりでござります」
その詞に熱ありき、その聲に誠籠りきり

飯降伊藏は同國同郡向淵村に生れて、樺本村に移轉せる大工の棟梁なりき、信義に厚くして且つ正直を旨としき、家屋建築の請負入札ある時は、賃銀を以て競爭せず、木材の善きと工事の堅きとをもて競爭せし人なりき、自村のみとは云はず、近村近郷の道路橋梁の破損ある時は、家内召使の寢鎭まるを

待ちて、自ら材木を持ち運び、土石を取り除きて、普請修繕せし人なりき、故に夙くより「正直棟梁」の名を取りて、四邊に知られたる人なりき

「産後が悪い喃、心に障りがあるぜ」

伊藏がまだ一言も云はぬ中に、美伎子は早く此方より聲掛けぬ

「産は輕うござりました、けれど産後の惱みは重うござります、親樣のお情を持ちまして、全快致すやうお手入を願ひます」

「お前は大工の中の大工ぢやぜ、棟梁の中の棟梁やぜ、もそつと早う來れば好いものをのう」

「近い處に住みながら、親樣の光りを見ずに居りました、お手入に由て、家内の病氣が平癒するでござりませうか」

「大丈夫ぢや、神樣は眞直な道をお照らしなさるで、お里さんはもう全快や」

「有難うござります」

「疑ふてはならぬ、身體は神樣の借物やぜ、病は心から起るものやぜ、自分の心の障害から、神樣の借物を損じては爲らぬで、心の歪みから治さねばな らぬぜ、お前の建てる家や土藏も、柱に歪みがあると叛へる、人間の身體も同ぢやぜ」と云ひながら前にある金米糖を一粒取り上げぬ、金米糖は美伎子の最も好める菓子なれば、信徒の者より時々持參する例ありき「これは金米糖ぢや、一つ進ぜる」

「有難うござります」

「この菓子には幾個も角がある、けれど口へ入れて居る中に、舌の誠で角が除れて、何とも云へぬ甘味が出る、人間もこのやうに角があると、角の間に塵埃が溜る、塵埃から病が出るで、其處を考えねばならぬ、理は神やぜ」

伊藏は兩手を膝に置きたるまゝ、詞は無く沈と考えぬ

「お里さんには塵埃が積んであるのやぜ、手入したらすぐ治るぜ、私の道は一筋の誠やぜ、誠は神やぜ、誠は月日やぜ、分つたか喃」

「結構なお道でござります、私を御門人にして下さりませぬか、すれば私、大工の棟梁を身内の者に讓つて、今日から道を弘めます」

「救け一條の大工に爲るぢやの」

「親様の子になつて、目に見えぬ家を築きます」

「道の棟梁になるのや喃」

「親様のお心に従ひます、私の力で一人の人でも助かれば、私も人間に生れた甲斐がございます」と伊藏は思ひ込んで云ひぬ

飯降伊藏は美伎子の後を受けて、この道の中心となれる人なり、幾百萬人の信者に「御本席様」と崇められて、一生涯を道の為めに盡したる人なり

彼が美伎子の弟子となりしは斯る動機なりき、彼が美伎子に由りて傳へられたる說諭の法と、彼が持ちて生れたる誠實の心とは、よく一致融合して、妻のお里を九死一生の中より救ひぬ、彼の信仰はお里の病氣平癒に由りて愈よ堅く深くなりき

(六)

年は暮れんとして、荒れたる庭に一もと殘る梅の枝、蕊のさゝ鳴き、皆な春を待つ景色あり、小く狹き村なれど家々には門松注繩飾、餅を搗く音長閑なりき

されど中山の家のみは春の準備に手を付けん要もなかりき、美伎子と秀司とは星より星を戴きて、一圖に働き稼げども、得る物よりも施す物多き為め米櫃は常に空なりき、末の子の小寒子は十六歳の小き手に精悍しく母を扶けて、時には道を說き、時には機を織り縫針す、賃銀は少からねど、それに因りて一枚の衣服を溫く着る餘裕だも持たざりき

一秀司の為めには娘、美伎子の為めには孫女に當れるが、近所合壁に餅を搗く音聞しきを聞き、母の膝に縋り付き

「家には何故お餅がござりませぬ、お祖母様にお願ひ下さりませ、お母様お母様」とせがみ云ふ憐れさ、小供心にはさもあらん、美伎子は例の如く他人より頼まれて木綿機を織り居たるが、此聲を聞くと共に

「爲らぬことを願ふても澄まぬで、神様のお授けなさる通りを一生懸命に守つてあるぢや、人間は小供の中から、分を守る心が無くてはならぬ、その場に安んじて神様のお授けを待てば、やがて美味いお餅も下さる、餘所他に無

い結構な物も給はる、急いではならぬ、焦思てはならぬ、働く者に飢は無いで、心配することはない、一椀の御飯を戴き、一枚の衣服を着るを、有難いと思はねばならぬで喃」

これ孫女に訓ゆるにあらずして、それとなく秀司の嫁に聞かするなりき、秀司は何事も運命と諦めれど、妻は凡婦の淺ましく、兎もすればこの境遇を哀む心も出て、折々は人知れぬ悲嘆の涙に泣くことありき

「御免下さりませ、押詰つてお忙しうござりませう喃」

腰に疎末なる辨當箱を提げて、門口より入り來るは飯降伊藏なり

「をゝ」と秀司は書物する手を止めて「今日も御參詣でござりますか」

「三度の食を戴かぬことあつても、信心を怠ることあつては爲りませぬ」と伊藏はまづ床の間に祀れる神前に平伏して、誠意なる祈禱を捧げつゝ「世間へは春が來るらしうござります」

「實にの、お前さんも仲間外れか」と秀司は笑ひながら云ふ

「世の春よりは、心の春でござりまする、私は何とも思ひませぬが、小供が不憫さうでござります、私も親樣を見習ふて、小供の物まで施與に出してござりまするゆゑ、今では明日食ふお米にもさし支えます」

「どうしても貧乏神ぢや、天理王命に福のお授けは無いと見える」

「然し、餓え死せぬが不思議でござります」と云ふ中に膝を進めて「恐れながら親樣へ申し上げます」

美伎子は機織る手を休めず

「伊藏さん、又講のお話ぢやな」

「親樣は兎も角、この御樣子では、御家内がお不憫さうでござります、賴母子講をお組みなさるなら、きつと骨を折ると申す者もござります、毎度申し上げてお氣に障るか知りませぬが、いつそ爾う爲されては何うでござります」

水を飲んでも死ぬことはあるまいでな」

「もう暫く辛抱せよ」と美伎子は動くさまもなく「身體は神樣の貸物ぢや、彼女の信念は石の如し、伊藏は强て云ふ詞もなく、口を噤むが例なりき

折柄一人の信者は、米袋に三斗ほどの糯米を納れて持ち出で來りぬ、美伎

子の説諭を聞きて、重き病の免れたる嬉しさに、心ばかりの物を持ちて、神前に献びを述べん爲めなりき

秀司はこの信者にくど〳〵と禮を述べ、これは真の些細なれど、誠を籠めたるお供物、何卒御受納給はるやう、と云ひながら差し出すを受け取りき

枯骨に肉するとは此の思ひなりき、美伎子の常に云ふ「働いてさへ居れば、何日か神様のお救ひあり」との詞を目前に現じたるは此なりき、伊藏は飛び上るやうに歓び

「恰ど好い處、これでお正月の御用意が爲ます、お嬢さまお嬉しうござりませう喃」

孫女の顔にも、その母の顔の上にも、温き春の色初めて漲る

「待たうでな〳〵」と美伎子は徐に機場より降り來りて「それはお前方に下されたのぢやない、悉な神様のお供物ぢやで、半分は伊藏さんお持ちなされ」

「え、滅相もない、私は男、何のやうにも致します、高の知れた三斗足らずのお米、此方へお裾分を戴いては、お嬢さまの召し上る分が無くなります」

「いや〳〵、神様の御供物、此方ばかりが享けては澄まぬ、私の家は半分で澤山ぢや、こゝばかりに事足てお前の家に事足らいでは、餅も美味うは戴けぬで、是非持て歸らつしやい、お前も神様のお子でありながら、神様の仰せを背いてはならぬぜ」

この中に小寒子は米袋の米を兩に分ちて、半を伊藏に渡すべく用意したり

き、伊藏も今は辭まんやう無く、片手に美伎子の心切を伏拜み片手に感涙を拭ひながら、米袋を戴いて起ち上る

されど伊藏が櫟本の家に歸りたる時、米袋の米は半以上を減じ居たり、そは三島よりの歸り道に貧窮の人を見るごと、慈悲の心禁め難く、難儀は誰がするも同じ事なり、と思ひて、三合五合づゝ頒ち與へたるに由る、流石に美伎子の高弟なりき、最もよく美伎子の本心を知れる高弟なりき

第拾壹章

（二）

當時美伎子の高弟として始終側に仕へたるは、山中忠七、飯降伊藏、中田義三郎、和歌市兵衛、辻忠作、桝井伊右衛門、この他に三五十人もありけん、日ごとに道を說き、日ごとに人の心を救ふをもて勤めとしき

慶應元年三月此等信徒の手に由りて、形ばかりの勤行場所を建築せり、費用總計六十餘兩を要したりき、これ五十人に足らぬ信徒より、二兩一兩三兩と醵出せる報恩の金銀なり、伊藏は建築全部を擔當し、忠七は米鹽を持ち來りて大工雇人を賑はしき

美伎子の道の次第に傳はり弘通するにつきて、不思議の故障迫害は海嘯の如く押寄せ來りぬ、そは三島を中心とせる土地一帶の神官僧侶山伏が、美伎子の道を弘通し行くを妬めるに起因したりき、實に當時のこの道の弘まり行く有樣は、宛ら火の原野を燬くが如く、草木の風に靡くが如く盛んなりき、

美伎子の道の弘通するに由りて、今まで加持祈禱を片商賣に爲し居たる怪しき禰宜神官、怪しき僧侶山伏は、兎もすれば衣食に影響すべき恐れありきて、彼等の迫害は、第一に罵詈惡口中傷なりき、されど根據なき惡口中傷に由美伎子の信念の搖ぐ筈無し、第二に石を投げ戸障子を破壞する亂暴狼藉なりき、されど小き石に壞さるゝ如き弱き意志を持たぬ美伎子は、夜な夜な雨霰と降り來る礫の下に安座して、徐ろに道を說きぬ、第三には白刀なりき、中にも小泉村不動院に住職して、修驗山伏の大先達と稱する角仁坊は、多くの徒弟を伴ひ來りて、美伎子を威壓せんとすること屢次なりき、今日も又十數人のはぶれ者を引き伴れて押し入りぬ、然も手に〳〵恐しき白刀を携

えたりき

「やい狐憑、それへ坐れ、云ひ聞かすことがある、四の五の吐すと、この白刀がお見舞ひ申すぞ」

左右前後よりつき出す白刀は、秋の野に咲く薄の穗の風に靡き亂るゝに彷彿たりき、美伎子は悠然としてその間に坐を占めぬ、驚き騷ぎたる氣色も無し、

小寒子は精悍しく側に引き添ふ

「汝愚にも付かぬことを云ふて、百姓どもを惑はすさうぢや、怨し難い奴、此分ではさし置けぬ、それとも此方の問ふことに答へるか」

角仁坊はきつと云ふ、美伎子は啞聾子の如く無言なり

「汝は人間の心に塵埃があるといふさうぢや、塵埃とは什麼ぢや、心の塵埃とは什麼ぢや、それを聞かう、まづそれを聞かう」

頭より嚙みも付くべき態度なり、もし一言の返答を誤らば、幾十口の白刀は容赦なく美伎子の身に向つて閃めかん

されど美伎子は無言のまゝ泰然たりき

「汝は人間の身體を神の借物と云ふさうぢや、借物とは什麼ぢや、神の借物とは什麼ぢや、何日神樣がお貸しなされた、詰らぬことを說いて、婦人小兒を惑はすは、佛の敵ぢや、神の敵ぢや、速かに降參爲」

萬一彼等多數の者、美伎子の身に迫ることあらば、身を以て難に代らんとの神々しき覺悟は、小寒子の美はしき眉の間に溢れぬ、角仁坊は滿面を朱の

如くにして更に手強く詰め寄りぬ

「汝は天理王などゝ、生體の知れぬ神の名を稱へるさうぢや、そんな神が何處にある、神といふは詐僞で、眞は野狐の類ぢやらう、さ、眞直に云へ、以來天理王の神を布留の川へ投げ捨てゝ恐にも付かぬ說法するを止めるか、それでなくば此の白刀を受けるか、何れとも心次第、二つに一つの返答爲」

角仁坊は烈火の如し、彼が一言云ひ終るごとに多くの徒弟の持ち居れる白刀は、尖頭鋭く閃めき動く

(二)

「お前達は什麽ぢや」

暫時して美伎子は徐かに口を開く、清き谿川の潺々として岩を下るが如き響き

「什麽ぢやとは什麽ぢや、汝小泉の不動院を知らぬか」

角仁坊は今にも眦裂けんとす

「不動院に魔が棲ひとは知らぬで喃、天理王命が神か、神で無いかを究める前、まづお前達の身分を聞くぜ、お前達は人間か」

「や」と角仁坊は惘れたる目を睜りぬ「存外の痴言、おのれ白刀が目に見えぬか」

「お前達が人間なら、天理王命も神樣やぜ、靈驗顯著な神樣やぜ」

美伎子は沈着きたる聲なりき、多くの白刀に圍まれながら、普通の坐にあるが如き態度なりき、角仁坊も多くの徒弟も、犯し難き威望に打たれたりけん、左右なく暴力を加へんとするさまも無かりき

「ま、沈着いて私の云ふことを聞かうでな、人は逆上せて居ると理が聞こえぬぜ、白刀で人を殺すことは能きても、物の理を殺すことは能きぬぜ、人の力には限りあつても、神の力には限りないぜ、心の塵埃は何んな物ぢやと尋ねてあつたが、お前達がそのやうな事を云ふて、理不盡に老人を威さつしやる、それが塵埃やぜ、心の塵埃が立つのやぜ、お前達釋迦牟尼佛の流れを汲んで居る身やぜ、それが此の樣は何事ぢや、

恰で虎か狼が弱い物を苦しめるやうなものやぜ、お前達は私や子達が稱へて居る神樂歌知るまいで唷、神樂歌の初めに「惡きを拂ふて助けたまへ天理王命」と云ふてある、惡きを拂ふのは當然の務めやぜ、人間の務めやぜ、狐や、狸や、獸物の務めやないぜ、人と生れて惡心を拂ふのが、不可いことか唷、」と美伎子は赤兒に物を訓ゆるが如く諄々と說き諭す「その惡心が塵埃やぜ、塵埃が積ると生地が失へるぜ、惡心が增長すると、身を滅ぼす基になるぜ、お前達は甚う氣が立つて居るやうぢや、氣の立つた時は物の黑白が見えぬぜ、黑白が見えぬと、取り返しの付かぬ仕損じするぜ、今日は歸らつしやれ、歸つて釋迦牟尼佛と相談して見さつしやれ、私の命が欲しければ、神樣のお許可次第何日でも進げるぜ、けれど私が死んでも神樣はお死にやないぜ、可いか、神樣は萬劫末代までお光りやぜ」

幾十口の白刃も、美伎子が一言の說法に敵すること能はざりき、紅き衣服着けたる枯木の如き老婦人は、白刃の中に泰然として、却てその前に突き出されし多くの白刃に搖亂見えぬ、前には角仁坊の罵詈惡口を受けながら、美伎子啞聾子の如く無言なりしが、今は美伎子諄々と道を說きて、角仁坊啞聾子なりき。

「お前達の白刃で私の骨を切ることは能きまいが、私の指頭でお前方の骨を碎くことは能きるぜ、誰でも可え、白刃を捨てゝ腕を出さつしやい、私の指には神樣が宿つてやぜ、小指と拇指とで摑んだら、角力取でも身動きは能きぬぜ、年は老てもお前達には負けぬぜ」

くわつと開きて、角仁坊を睨みたる目の中に、日月宿りあらするかと疑はるゝまで輝きあるき、實に美伎子の手の力は、他に匹儔あるまじく強かりき、彼女は指頭の力に由りて、是まで多くの奇蹟を殘しぬ

美伎子を威服し終らずば、此處一寸も去るまじく覺悟せる不動院の徒弟も、漸くその及び難きを知りて狐鼠々々と逃げ出しぬ、角仁坊も初めの勢ひには似ず、一人去り、二人去りする頼みなき徒弟を呼び止めんとはせで默居たり、折柄施與を乞ふ難儀の輩、門口に集ひ來る

「お助け下さりませ、今日もお助け下さりませ」

美伎子は小寒子に指圖して、家に在るを手當り次第に恵み遣りぬ、米、飯、衣服、野菜、一として美伎子の心に執着するはあらざりき、慈悲善根を行ふ前には、彼女の心水の如く淡きが彼女の特質なりき

(三)

彼女は貧困者に物を與うる時、必ずそれに誠ある教訓を添うるが例なりき、小寒子が米、飯、衣服を持ちて、門口に身を進むる時、物乞は潮の寄する如く寄せ來る、美伎子はその身の周圍に尙幾口の白及臨み居るを知らぬ如に、悠然と突立ちて

「其處のお人達、今日は施與を進ぜます、然しその施與が何日でもあるとお思ひなさると當が外れます、人の情はお日樣ぢやないで、毎日照るとは極らぬぜ、人の善根は雨露やぜ、降る時もあれば降らぬ時もあるぜ、降ると極まらぬ雨露を當にして、井戸の水を汲まずに居たら、お前方は渇えて死ぬぜ、これからは慈恵施與を當にせいで、一生懸命に働かつしやれ、水搔の行き屆く田や畑は、旱魃にも青々して居るぜ、人間は働く爲めに生れたものやぜ、遊んで居てお金の入る筈は無いぜ」

一合二合の米麥は、一時の究を救ふのみなれど、美伎子の教訓は一代を救ふなり、慈恵の物は薄くとも、詞は重く誠ありて一々難澁人の骨を刺すなり

「貧乏ほど辛いことはござりませぬ、これから後は働きます」

「貧乏は怠懈ると來るぜ、怠懈ると塵埃がたまるぜ、精出して箒を取る家には、見たうても塵埃が無いぜ、働いて神樣へ日の寄進をするものは、難儀したうても氣樂になるぜ、樂をするのは左團扇で美味い物食ふばかりやないぜ、心を清う家業に精出して、神樣のお心に背かぬやうするのやぜ、雲のない月は清しいぜ、慾を捨てゝ働く心はその月やぜ」

實に美伎子の云ふ處は神のお聲なり、小寒子の手より、慈恵の物を受け得たる難澁人は、飢と心との救助を得て、嬉しげに歸り去る、この間に徒弟等の手に閃き居たる白及は、悉く影を潛めて、角仁坊が懺悔の聲のみ高う聞こえぬ

「もう何も云はぬ、私が悪かつた、私の目が腐れてあつた、先刻からの不禮を恕して下され、この〻ち悪口せぬ、此後妨げせぬ、お蔭で私も眞人間に爲られるよ」

「露でさへ玉と光るぜ、心に濁りの無い者は何日も玉やぜ」

「私等の白及でお前は切れぬ、一口の及物にも膳を消して、助けを呼ぶ者の多い世に、お前は幾十口の白及の間に泰然として、有難い道を說かつしやる、狐では能きぬ、まことの神ぢや、神に近い人間ぢや、不動院今まで人に頭を下げたことはないが、今日ばかりは頭を下げる、宥して下され、惡いことをした」

惡心野性を取り除けば、虎も狼も普通の獸物なり、角仁坊の面の上には、懺悔の色光り輝く

「堪忍を旨とさつしやれ、慈悲を外にして佛は無いぜ」

初め押掛け來りたる時は、火の如く烈しかりし角仁坊が、今は綿の如く柔かになりて退く、美伎子を征服せんとして來る神官山伏は、皆な彼の如く美伎子に威服され終る、紅き衣服は彼女の鎧、白及も鏃もその鐵鎧を徹すには鈍かりき

大和一國の禰宜神主を取締る守屋筑前守は守屋神社の神官にして、自ら物部守屋の末葉なりと稱しき、美伎子が奉ずる天理大神に、信者の數增加する由を聞き、いでわれ野孤の性體を見究め呉れんと、行裝美々しく中山家へ乘り込みたるも此頃なりき、されど尙美伎子の爲に說き伏せられき、美伎子が所謂「理は神やぜ、神は八方八面やぜ、」との道理は何れに對しても金城鐵壁なりき、筑前守はほと〳〵感じて「お美伎さんの理には眞がある、理は卽ち神、理の弘通は神の御心の洽く至るのぢや、金はあつても害は無い、殊に天理大神とあるが、十柱の神を總稱したるなりと云へは、その敎に少しの不都合を認めぬ、これなら私が許す、私が許して古市の代官深谷源太左衞門殿へ添書を進ぜる、神祇察の下につかつしやい」

一時前の敵は一時後の味方なりき、彼は古市の代官に添書しぬ、代官深谷源太左衞門は乘て筑前の人格に敬服し居たるなれば、直に領主藤堂大膳太夫

の口上を乞ひ、それに由て神祇官寮吉田侍従の許へ願ひ出で、こゝに始めて天理大神の存在を公邊に認められて、公然吉田家の配下に属しき、實に慶應三年七月廿三日の事なりき

(四)

美伎子が神樂歌及び十二下り歌を自作し、お手振を創めたるは此時の前後なり、神樂歌も十二下り歌も、多くの人の耳に入り易きをもて主としたれば、詞を卑近に取りて、深き意味を弘通せんとしたる苦心容易ならざりき、然もその幾十百章の歌は、晝夜の別なく神の告によりてなされき、暗き寢室より「筆やぜ〳〵」と呼ぶ時は、妙思必ず浮び居れるなり、秀司小寒子或は付き添ひの者より紙と筆とをさし出し置く、すれば翌日の朝、幾章かの歌成らぬは無し、暗の中に文字を書きて、少も亂れたる所なきが、美伎子の他に優れたる業なりき

神樂歌のみにはあらず、神托、豫言、或は道の上に於ける眞理、苟にも後

に傳うべきものは、皆な美伎子の「又お歌が出來た、今度は五下り目ぢや」

ほの〴〵と天の明くる際より、信仰怠りなく勤行所へ詰め居たる飯降伊藏は、秀司の手より美伎子の手記せしを受けて云ひぬ、信者は悉く膝を進め、「五下り目は何のやうなお歌でござります」

「今讀みます、皆さんお聞きなされ」

伊藏は手を洗ひ口を嗽ぎ、襟を正して讀み初めぬ、歌は十章あり、皆假名をもて記されき

一つ　ひろいせかいのうちなれば、たすけるところがまゝあらう

二つ　ふしぎなたすけはこのところ、おびやはうそのゆるしだす

三つ　みづとかみとはおなじこと、こゝろのよごれをあらひきる

四つ　よくのないものなけれども、かみのまへにはよくはない

五つ　いつまでしん〳〵したとても、やうきづくめであるほどに

六つ　むごいこゝろをうちわすれ、やさしきこゝろになつてこい

七つ　なんでもなんぎはさゝぬぞえ、たすけいちじよのこのところ

八つ　やまとばかりやないほどに、くに〳〵までもたすけゆく

九つ　こゝはこのよのもとのぢば、めづらしところがあらはれた

十　どうでもしん〳〵するならば、こうをむすぼやないかいな

伊藏は讀み終る、人々は一圖に聞く

「有難いお歌ぢやな、水と神とは同じこと、心の穢れを洗ひ切る、とは何とも云へぬ善い訓へでござります」

「慘い心は打ち忘れ、優しい心になつて來い、とは親樣の思召し、何日も變りでござりませぬ哺」

と桝井伊三郎は感嘆の頭を傾く

「やまとばかりぢや無いほどに、國々までも助け行く、と說かれてあるで、この道は段々に廣まるぜ、今に日本中がお助けを受けることになるぜ」と一人が云ふ

「日本中、そんな狹いことあろかいの、やまとばかりで無いのは、今の信者

の數でも知られる、親樣のやまとは日本ぢやわいの、日本ばかりではなく、外國までも此道に由て助けるといふ思召しぢやわの」と伊藏は詞に力を入れる

「爾うであらうかな」と一座は皆な目を見合せて「やまとゝあるは日本の事であらうかの」

「そりや勿論、親樣の思召しは大きいぞよ、大和一國ぐらゐを目的にしてお在ではないぞよ」

「外國までも……」と人々は尙信じかねて「行けやうか」

「誠があれば何處へでも行かれる、語は通じいでも誠は通じる、これまで親樣のお云ひなされた事が、一でも違ふたことはない、疑はつしやるな」と伊藏は堅く云ひ切つて「そんな事を詮議するより、どうせ信心するならば、講を結ばぢやないかいな、と仰せられてある、講は組合ぢや、佛家でいふと宗門ぢや、これも結構な思召し、それが無うては信仰に構えがない、こゝに居合す者先に立て、百人二百人づゝ講社を組もうでないか、すれば親樣もお歡

ぴぢや」

一同皆なそれに同じて、坐中色めき立ちたる時、物々しき扮打せる神官入り來りて、美伎子に面會を求めたりき、布留宮の社務所より派出せられしなり、秀司出でゝ來意を問ふ

「百姓の家へ多人數の參詣者を集めて、加持祈禱さま〴〵の事をするといふ、不屆至極のことぢや」

これ神官の口上なりき

「當方より集めるのではござりませぬ、先方から人が來るのでござります」

「人が來たら何故追ひ拂はぬ」

「お詞までござりませぬ、私どもでも迷惑に存じまするで、幾度斷りを云ふか知れませぬが、それでも管はず腰辨當で押掛け參ります、布留宮（石上神社）の御神德、又はお上の御威光を持たせられて、多人數集まり參らぬやう、お手當をお願ひ申します」

神官は要領を得ずして去りぬ、されど美伎子の唱ふる天理大神の御前に、幾百幾千幾萬人の信者を出すは、此の邊に散在せる神社佛閣の堪へ難き苦痛なりき「邪教退治」の願書は、日ごとに奈良縣廳に提出せらる、これやがて政府干渉の端緒なりき

（五）

美伎子はそれまで黒紋付の衣服のみを着し居たるが當時より好みて紅き衣裳を着たりき、私が訝ういふものを着たら、世界の人が異しう思ふやらうけれども、これを着ぬと術ないで喃」とて、紅金巾もしくは紅メリンスの衣服を着、同時に足袋も襦袢も皆紅を用ひたり

「紅い物を着ると藥やで、紅い處に月日やどるで」

これ美伎子の托宣なりき

丹波市に在りし奈良縣出張所より、中山美伎子同じく秀司同道、山村御殿（圓照寺宮）へ出頭すべしとの命下りぬ、これ實に明治八年八月二十六日の事なりき

出張所の役人、特に山村御殿を選みたるは、飽くまでも美伎子を狐憑と信じ居たればなりき、圓照寺は代々宮家より住職あらせたまふなれば、その御威光に由りて美伎子の身に憑きたる狐、必然退散すべしと思ひたればなりき、折柄秀司病氣に付き、代人として辻忠作、美伎子には長女政女付き添ひ、例の紅き衣裝に身を飾りて、山村御殿へ出頭したりき、供に立ちたるは中田義三郎外二人なり

尋問所は御殿持佛堂に設けられ、赫灼たる佛燈、燦然たる金佛の威容を照らして、靈光眞に四邊を拂ひき、縣廳より は祉寺掛稻尾何がし出張して、嚴重に控えたり、美伎子果して野狐ならば、やがて恐れて退散せん、との豫期なりき

されど美伎子は毫恐れたる樣もなかりき、徐に佛壇の前に坐りて、暫く念佛を唱へたる後、役人の方に向き直りぬ、稻尾何がしは、今にも氣絕するならん、今にも長き尾を出すならん、と瞬もせで見てありしが、させる風も無く沈着きたる態度、宛ら大木の搖ぎなきが如し、これに案外の思ひしたれど、

何がしは聲を勵して

「其方取るに足らぬ惡說を以て、多くの人を欺き誑かし、祈禱料供物料など莫大の金錢を貪り取るといふ、言語同斷の仕方、以後を謹み、再び左樣な罪を犯すに於いては、其分でさし置かぬ、よく心得」

破鐘の如き聲を絞りて、頭上より叱り附けぬ、美伎子は惡びれたる樣も無く

「世界は神の子やぜ、皆な可愛いぜ、助けて遣りたいゆゑ助け一條のお話するのやぜ」

これその返答なりき、以後は何事を問はれても、莞爾笑ふのみにて言はざりき

「辻忠作は其方か」

何がしは詞を改めぬ、忠作は頭を擡げる

「其方も仲間であらう、お美伎の取た金を其方も分配を受けるであらう」

「恐れながら私は毎日腰辨當で參詣して、神樣へ御奉公申し上げるものでご

ざります、金錢なんぞ一度も手に觸れたことござりませぬ」

「僞言を申すと許さぬぞ」

「親樣は世界の難澁人に米や金を施されます、けれど他人から金銀をお貰ひなされたことはござりませぬ」

忠作と役人との問答の間、美伎子は無言のまゝ打笑み居たりき、彼女は圓照寺宮の持佛堂に在るも、家の勤行所に在るも同じ態度なりき、縣廳の役人に對するも、信者に對するも同じ心なりき

「狐憑にあらずば神經病者なるかも知れじ」との議は役人社家の間に起りぬ、由つて直に醫師を招きて、美伎子の身を診察させぬ、醫師は仔細に診斷し終りて「さて〳〵不思議、七十七歲の老婦人に二十歲前後の脈が搏ちます」と目を圓うして引き退りぬ

今は疑ふ所無し、一まづ歸宅を許されんとす、役人命じて「お手振といふを見せ、これにて見物する」

由て忠作は筋面白く神樂歌を謠ひ、義三郎、立ちて手振を舞ひき、圓照寺宮殿下よりは有難きお詞あり、茶菓を頂戴して引き退りぬ

（六）

美伎子は專念に此道の布敎に勉めぬ、彼女の精神主義、此道の本領意味を最も簡單明白に說明せる神樂歌、十二下り目全部を作り上げしは此時なり、

「正月二十六日人數揃うて勤めこしらべ」と十數年後の運命を豫言せしも此の時なり「慾を忘れて日の寄進、これが第一肥料となる」と信者その他に安心立命の基礎を授けたるも此の時なり

天理大神の敎は美伎子の唱道に由りて、次第に弘く行はれたれど、美伎子は十分の滿足を得ざりき、この年、（明治十二年）深く覺悟する所あり、七十五日間の火食斷をして、神の力の發顯を示さんと云ひ出でぬ、年若き間にても、十日二十日は爲し得べし、百日近き火食斷は容易く爲し得べき事にあらず、殊に七十を超えさせたる御身、萬一の事ありては爲るまじ、斯ほどには爲されずとも、神のお力は現はれある、人々切に止めたれど、美伎子は遂に

この大難行の人となりぬ

されど餘りに人々の諫め云ふに由りて、時に飯を食べんとすれど、少しにても火の入りたる物は、持つ手硬ばり慄ひて、箸を運ぶこと能はざりき、美伎子のこの覺悟は神の命じたまふ所、少しにても神の御意に逆ふ時は、自然美伎子に障り來る、故に彼女は謹んで命を奉じて、七十五日の間、信者より參らする少量の神酒と、二三顆の果物とを食せるのみにて、一切の飲食物に手を觸れざりき

七十五日の斷食、彼女の身に何の障りもなかりき、痩も見えず色光澤にも艶りなく、平生と同じ態度なりき

「お前方は私が火食斷して居たで、身體が弱つたと思ふであらうが、ちつとも異つたこと無いぜ、力もあるぜ、見せて進ぜう」

信者の甲乙、脊戸の小川に醬油樽洗ふてありき、美伎子は其處へ出でゝ見る、一人は四斗樽に水の張りたるを指し

「お前、その樽持てるか」

「こんな物、持ていでかいな」

「それなら持て見、一人で持つたら酒一升買うて進る」

「きつと唷、きつと酒買ふな」

一人の若者は斯く叫びて、力任せに彼の樽を持ち上げんとしたれど及ばざりき、他の若者も交る〳〵樽を抱えて「已こそ〳〵」と試みたるが、誰の力にも爲し得ざりき、美伎子はつと寄りて、若者どもの持ちあぐみたる樽に手を掛けしが、ずて手桶なんどを扱ふやうに輕々と持ち上げて、左右へ二三度も振りたりき

八十に手も屆かんとする老人、七十五日が間、少量の酒と、少量の果實とに命を繋ぎたる老婦人、水を張りたる醬油樽を輕々持ちたる不思議さを見たる者、誰として感じ驚かぬはあらざりき、折から小其後又奈良警察署より召喚あり、明日出頭すべしとの事なりき、

寒女は病に伏して、熱氣甚しく閉ぢ籠りあり、一圖に神の御旨をのみ念とする辻忠作は、明日のこと心に懸りて眠られず、密に美伎子の前へ出でゝ「明

日のお取調べに就いての御返答、何様申し上げて宜しうございませう哺」と問ひたる時、美伎子は一言「善悪とも、神様にお任せするやぜ」と返答しき、彼女は唯運命を神に任せて、神の命じたまふまに〳〵活動するなり

この時は拘留三日の處分なりき、三日の拘留美伎子に取りて什麼の關する所なけれど、彼等信徒の爲めには一代忘れ難き哀しき紀念を殘しき、そは小寒子の死亡なりき、母様警察署に留め置かれたりと聞くが否な、孝心深き胸は、板の如く堅くなりて、美伎子の歸宅を待つ間もなく、永き眠りに就きたりき

「神が強るのやぜ、それは節やぜ、節から芽が出るぜ」

これ美伎子が拘留より放たれて後、小寒子の死を聞きたる時、信者親戚一門の人に向ひて、云ひ諭したる詞なりき

其後美伎子は小寒子の喪にあるが爲め出頭せず、中田義三郎、辻忠作代理として赴きたるが、「天理大神など云ふ御神在ます筈なければ、以後は天照皇大神宮を信仰せよ、さすれば當方にも保護の道あり」と云ひ聞けぬ、中教院は奈良縣全部の社寺監督所なりき

秀司は此慘澹たる迫害干渉の中に病みて、明治十四年三月十日死亡、その妻の松枝は十五年美伎子が奈良縣監獄に收容され居れる中、溘然として良人の後を追ひき、こは後の話なれど序なれば記し置く

（七）

其の後も又た屢〻縣廳よりの干渉壓迫ありたれど、さまでにてはあらざりき

信徒は雲の如くに集りて、日ごと美伎子の諭を聽かんことを求めぬ、美伎子の巧みに誠ある諭を聞く間、人は皆な浮世の痛苦を忘れ去るなり、實に神樂歌を敷衍して、譬へを卑近に取りながら、比較的高く心切なる理を說く、諭の中に神を敬ふべき事、皇室を尊むべき事、御國の爲には一命を擲ち捨つべき事、夫婦和合は人倫の大本にして、緫ては世界造始の原動たる事、人と

しては德を脩め行を正しくすべき事、世に處しては誠を唯一の利器として、總の鹿埃畚鍬を拂ふべき事、天理を明かにして安心立命の地を得べき事、眞人間となりて神恩に報ひ奉るべく、將た國恩を返し奉るべき事、凡そ人の務むべきは皆な誨へ、人の爲すべきは皆な心付け、而して多くの人心を暗黒より明白地へ導き行くなり、されば美伎子の諭を聞く者は、雲を排いて新月の清々しきを見たるが如く、飢えたる腹に美味き物を滿てたるが如く、云ふに も云ひ難き安心慰藉を得るなりき

安心慰藉のある處、愉快の伴はぬ筈なく、愉快安樂の在る處、人の集るは甘きに蟻の集ると同然なり、美伎子の教は水の低きに就くが如く東西南北、火の原野を燒くが如く四方八方して、明治十五六年には信徒の數十餘萬人に及びき、然も美伎子は斃れたる茅屋にありて、紅メリンスの衣服に安んずること一日の如し

信徒は此樣を見るに見かねて、十六年五月より美伎子の爲めに休息所を建築すべく工事を起し、十月二十六日普請成りてそれに移りぬ、美伎子この時

八十五歳、慈悲の爲めに家屋を毀ちてより三十餘年、始めて家らしき家に入りたるなりき

信者の數增加するにつきて、三島庄屋敷は諸國の人の入込場所となりぬ、當時の戸數は六七十戸ほどもありけん、土地の人々も最初のほどこそ「中山の狐憑め、馬鹿氣た眞似ばかりをする」とて嘲笑ひ、たれ、以前は土地の人の往來する外、草鞋の痕、脚絆の影を見ること稀なりし街道に、朝早くより夜深るまで「結構でござります、親元樣は此方と見えます」と語り合ひ云ひつづけて、その間々に神樂歌謠ふ參詣人の絶え間なく、昨日は阿波の人、今日は江戸の人、明日は播州の人、明後日は下總の人と、美伎子の教へたる講社を組みて、十人五十人百人二百人と、大いなる參詣人を見るに至りたる時、誰云ひ合さねど、村中の者集らて多數の信者に恐しき迫害を加うるに至りたりき

恐しき迫害とは、信徒の者と見れば、場所を嫌はず石を投げ付くることなり、口を極めて惡口雜言することなり、そは美伎子を憎むにもあらず、美伎

子の道に反對するにもあらず、他に一種の理由あるなり

「人が來れば知合も來る、天理さんへ參詣したから、一寸寄ると尋ね來られるを捨ては置けず、時には酒を買ひ、下物を料理、祭典祝言佛事の外に客をしたる事なき座敷を清めて、一日の仕事を休む苦痛あり、それ俄雨とて傘、それ日が暮れたとて提灯、兎角する中には一文菓子屋も出きる、見世物小屋も開かれる、さすれば村の費用莫大なり、お美伎さんの諭さへなくば人も來ず、人が來ねば天下太平國土安全なり、速かにお道を廢止して下され」

斯く叫びて日ごとに中山家へ迫りたれど、美伎子が參詣者を招くにあらずして、參詣者自然に集り來るなれば爲ん方なし、金と物とに引かれ來るものならば、金と物とを地の底へ埋めて、群集を制し得べけど、德と誠とに導れて來るものを防ぐこと難きは、宛ら水の流れを堰き止むるに道無きが如くなり、止むを得ずば美伎子命を捨つるにあれど、假し美伎子幽界に赴くとも、その德の殘る間、諸人の信仰消えざらん、その誠存する間、衆人の參詣止む時なからん

故に村人は信徒參詣者を迫害するなり、小き掌をもて大河を堰かんとする愚を學ぶなり、命を捨てゝも親許に歸らんとする者、石の礫をなど恐れん、惡口雜言をなど恐れん

「結構でござります」は天分に安んずる美伎子の敎、美伎子の信徒は悉く一家族をもて見るが故、美伎子を親とし、庄屋敷（中山家）を親元とし、信徒自身を子と見做すが爲め、參詣すると云はず歸ると云ふなり、彼等信徒の美所こゝにあり

（八）

斯くまで甚しく反對し迫害せし村人の心も、自然に柔ぎて、やがて美伎子の德に懷ぐべき時機到來しぬ、やがて節なり

この年四月より六月へ掛け、大和一圓殊の外の旱魃なりき、七月土用に入りて後は、農民が命と賴む一滴の雨も降らざりき、中にも三島庄屋敷は、田面一體に龜裂して、稻の葉は燒けるが如くなりぬ、井戸も池も皆な替え乾し

て、その日の飲料水にも究るほどゝなりぬ、村人は寺院と産神とに集りて、百萬遍を繰るもあり、祝詞を上ぐるもあり、三日三夜が間、大矩火を焼きて雨乞ひしたれど、卯毛の頭の塵ほども驗なかりき、此上の頼みは天理大神なり、從來は惡口雜言罵詈嘲弄を盡したれど、苦き時は頭を下げて、衷心より御利益を請ひ奉る外無し、やがて磯西慶次を總代にして、美伎子へ雨乞祈禱の事を申し入れぬ

されど此時は尚縣廳の白き眼を免ること能はざる間なり、監禁拘留幾度か處刑を受けたる後なりき、警察署よりは「一切人を集むべからず、祈禱もしくは祈禱に類似したることとすべからず、說敎もしくは說敎に似寄りたることとすべからず、背く時は直ちに拘留す」との嚴達を受けたる時なりき、由て秀司死して後、美伎子の手許に引き取られ「お前は心柱やぜ、この敎への心柱やぜ」と云はれ、美伎子の側にありて、內外を助け居たる眞之亮（春女の子、美伎子の孫）は總代を一室に招きて

「お前方の難儀を知らぬではないが、何分にも警察の命令が嚴しいで喃、も

し雨乞の祈禱をして、祖母が拘留にでもなると、多くの信者が心配するで、これはお斷り申す外ござらぬよ」

と云ひ聞けぬ、慶次は押返して

「御當家では日頃村の者がお道に反對するで、それをお腹立か存じませぬが、これからは氣を付け、決して不都合は致しませぬ、どうぞ村の難儀をお助け下さるやう、親樣へお願ひ下さりませ、このお許可を得ぬ間は、私歸つて皆の衆に顏を合す事がありませぬ」

「お前の詞はよく分つた、村の衆の望みもよく察しる、日頃村の衆が私等の敎へを惡口さつしやるゆゑ、雨乞ひをお斷り申すのでは無い、お前方も知て居る通り、警察のお布令が嚴しいで、加持一切は相成らぬ、雨乞も又加持祈禱の中ぢやでの、村方衆のお頼みでも、警察のお布令に違背することならぬわの」

「警察へは私共がお願ひ申します、親樣のお慈悲で雨が降れば、村一統が親樣の代りに出て、何うやうなお處刑も受け、親樣に徵慮も御難儀は掛けませ

ぬ、お神楽歌に、何んでもなんぎはさゝぬぞへ、たすけ一條の此のところ、とお説きなされたは、斯ういふ難儀をお救ひ下さる爲ではござりませぬか、以來一言の惡口申さぬのみか、此事お聽き入れ下さるに於ては、一村悉く講社のお仲間入を致します」

慶次は理を説き詞を盡して、一生懸命に嘆願す、眞之亮聽き入れなくば、こゝに絶食して倒るゝまで、此場を退かじとの意氣込なりき

眞之亮は到底望みに應じ難き旨を云ひ切りて裡に入りぬ、されど慶次の熱心は重立ちたる信徒の人々に相談しぬ、警察よりの命令はあれど、村の難儀を見捨てゝは心無し、左右何れとも親樣の御心に任せ奉らんとて、信徒一同、美伎子の前に出で、村總代磯西慶次申し入の次第を語り、旱魃の狀態、村民一統困難の樣を語りたる後

「この返答、何うしたものでござりませう」と伺ひ出でぬ、美伎子は暫く打ち案じありたるが、やがて徐に頭を擡げて

「雨の降るも自由、降らぬのも自由、只お前方信仰の誠に由るでな」

確乎とせる堅き信念あるが如き響きなり、信徒は早くも美伎子の心を覺りて「親樣御承知あらせ」の旨を、慶次の耳へ執次ぎぬ、慶次の慶び譬へんに物もなく、宛ら鬼の首を獲たる如く、村民の屯せる氏神の拜殿へ駈け付けき

(九)

時は明治十六年六月十三日（陰曆）の午後三時なりき、「村の爲に雨乞を爲すべし」との美伎子が堅き信念によりて覺悟されぬ

照りつゞきたる大空は、一點の雲もなく晴れ渡りて、金をも爍くべき炎熱は烈々として水氣なき田圃の水を射る、稻には枯葉交り、畑には陽炎立ちて、そよとの風の戰きも無き暑苦しさに、蟬も又音を止めて、見渡す限り焦熱の地獄を現はす、もしこゝに雨あらば、草も木も蟲も獸も蘇生せん、その一滴には人の命宿り、その一滴には黃金の光り輝くべし、三島庄屋敷一帶の村民は、老ひたるも若きも氏神の森に集ひて、美伎子の雨乞に果して驗あるか否かを見る

まことに美伎子のこの一舉は、村民の迷惑を釋く屈竟の機會なりき、日本六十餘州の津々浦々まで美伎子の信徒の行き渡らぬ所なけれど、豫言者故郷に擇ばれず、三島庄屋敗丹波市の處々には尚美伎子を狐憑として嘲り笑ふものありき、故にこの一舉、美伎子の祈願神の容る所となりて、一滴の慈雨を下したまふことあらば、いかに頑迷の土地人も、命の的を救はれたる嬉しさに感泣して、再び罵詈の口を開くことあるまじ

時刻は來りぬ、信徒門弟は黒紋付の單衣に、同じ袴を穿ちて、産神の社頭に集りぬ、美伎子は家に在りて天理大神に丹誠を抽んずるなり、門弟信者雨を祈ること半時あまり、祈禱果てゝ神樂勤を參らする、柏手の音、太鼓和琴の響き、燒けるが如き明神の森の中に滿ち渡る

「雨を下さりませ、諸人危急の場をお助け下さりませ」

これ美伎子の門弟信者が異口同音に唱うる處なりき

十二下りの神樂終りて、次には坤、次には乾の方角に對ひて、誠ある祈禱を凝らすこと少時なりき、村民の多くは高く大空を仰ぎ、近く門

弟等が熱心なる祈禱振を見「降らぬかしら〳〵、天理王命にも御利益は無いと見ゆる」

失望の聲漸く起らんとする時、失望の聲につぎて、嘲笑罵詈の聲漸く來らんとする時、氣の早き人々は

「やつぱり狐憑ぢや、狐憑が何をするものか」

と嘯き初めんとする時、乾の勤行やうやく終らんとする時、東の方、桃香野の山の頂に、一むらの黒雲現はれしよと見る間も無く、忽ち一天かき曇りて、今までの蒼穹は宛ら墨を流したる如くになりぬ、村民は歡びの眉を開く

「や、雲が出た、御利益が見えた、やつぱり神樣ぢや、助けたまへ〳〵」と狂喜の如く云ふ

門弟信徒は乾の方の祈禱を終りて、更に丑寅の祈禱に掛りぬ、丹精に丹精を重ぬる人々の額には、露の如き膏汗浸潤み、眉の間には、火の如き熱誠溢れかゝやく、折から一陣の風さつとおろして、神木の梢に渡るが否な、沛然たる大雨盆を覆へす如くに至る

「雨ぢや〳〵、天理大神の救ひの雨ぢや」

鼎の湧くが如き歓び聲、幾百の村民、濡鼠の如くなりて躍り狂ふ間、稲妻間なく閃めきて、雷鳴の音おどろ〳〵しく、少時の中に落雷三所あり、稲は皆な生きぬ、畑の物皆な生きぬ、森も林も草も木も、悉くこの雨乞の雨に生きて、村中に雨祝ひの糯米蒸す烟の色白く颺る

美伎子は狐にあらずして神なりき

村民は急雨にづぶ濡となりながら、我も〳〵と入り來りて、中山家の庭前に設けありし甘露臺の周圍を繞り、例の神樂歌を唱へながら、報恩の心を致す、手の舞ひ、足の踏む所を知らずとは此れならん」

されど美伎子及び村民數名は、この爲めに丹波市分署へ檢擧せられて、それぞれ拘留の處分に遭ひき、「警察署の命令に背きて、多人數の集合を敢てしたるは、不都合なり」との理由に由る

第拾貳章

（二）

美伎子の教は雪間に匂ふ梅の如くなりき、多くの干渉迫害に遭ひながら、漸くに眞價を認められて、次第に處々へ弘通し行くは、白梅一枝霜雪に壓れながら、高き薫りを放つが如く貴かりき

明治十八年神道本局より內海古川二官吏の出張あり、天理大神の意義、美伎子の教育、現在過去に於ける信徒の行狀を取調べ、社會に益ありて害なきを認め、これならば公然布教すとも差支へなからん、速かに其筋の許可を受くべしとの勸めを得たれば、眞之亮はやがて願主となりて、神道本局へ「天理教會設立」の願書を出し、直ちに許可を經て、神道直轄の下に布教傳道を爲し得べき自由を得き「天理教獨立」の根蒂こゝに胚胎す

されど奈良縣警察署は前に異る事なくして、美伎子の教なりき「命令違犯」の故をもて、美伎子を拘留監禁すること幾度といふ數を知らず

「警察もあんまりぢやの、神道本局のお許可を得て行て居るが、何故警察のお氣に障るのでござりませうな」

信徒門弟は恨み聲に云ふ、この度ごとに、美伎子は心より誡め云ひぬ

「人は商賣が肝腎やぜ、人を恨む暇に、自分の商賣に精出すやぜ」

美伎子の門弟は美伎子の腹中を知らざりき、日ごとに敎誨を受けながら、その骨髓の十分一百分一をも解せざりき

神のお爲めにお盡しなさる親樣を、囚人同然に繩掛ける、警察の人達は神の敵ぢや、神さま何故御罰をお當てなさらぬでござりませうな」

「疑ふやないぜ、神を疑ふては澄まぬぜ、神さまを惡口する者が、何故口が歪まぬやらうと疑ふ時は、この疑ふた者の口が歪むぜ」

餘りと云へば無法なる干渉に腹立ちて、火の如く憤怒し居たる門弟信徒も美伎子の美しき心に打たれて、恨み、忿り、憤りを漏らすものなかりき

「此の道は心の立て替えやぜ、理だけ說いて、後は彼方の心に任せるやぜ」

美伎子は常に斯くの如く云ふ、心の立替えは、人心の改善なり、惡を去りて善に就くを云ふなり、惡心なき者疾病無し、惡心無きもの禍害無し、惡心無き者獨り天上の和樂を得ん、これ彼女の理想なり主義なり

(二)

信徒の增加するにつきて、警察の干渉も又甚しく爲り來る

幾十回の拘留監禁も美伎子の敎を防ぐこと能はざりき、美伎子の身に繩を掛くることを得れど、天理大神に繩を掛くること能はざりき、美伎子は牢獄の中にありても、其敎へは滯りなく布かれ行くなり

美伎子の拘留さるゝ時は、諸國の信徒雲の如く集りて、留置所の周圍を繞る、巡査制すれども飯の上の蠅を逐ふが如し、放免の日は信徒期せずして警察署の門前に集りて、美伎子の出で來るを待ち、美伎子の恙きさまを見て安堵し狂喜し感涙に咽ぶなり、美伎子は幾度拘留せらるゝも、又幾十日拘監せらるゝも、絕えて牢獄の物を食はざりき、人々いかに勸めても「不淨のものは食べぬでな」とて遂に一度も手を付けたること無し

家族門弟の苦勞心配は此の爲めなりき、八十の上を超えたまひしお身が、四人同樣の扱ひを受けさせて、穢しき牢獄の中に繋がれたまふさへあるに、一粒の飯だも口にしたまふことなくば、御身體衰弱せん、御心障りあらん、切ては日頃好ませたまふ金米糖にても參らせたけれど、その許可だも得難きを何とかせん

されど美伎子は平氣なりき、幾日の拘監、幾十日の絕食、絕えて身體に障ることなかりき

明治八年より引き續ける防害干渉も、美伎子の敎に些の影響なくて、諸國に傳導思ひのまゝに功を成すのみなれば、警察署は意地にもなりて、以來參詣人を寄せ付くべからず、加持祈禱に類する行爲あるべからず、もし犯す時は立ちどころに拘留せん、この嚴命、矢の如くに降り來る

此の嚴命下ると共に、巡査は日に三度、夜に三度入り來りて、屋敷中を檢視するなり、甚しきは裏表より一時に押し寄せて、天井を突く、壁を蹴上げる、もし一人にても參詣する者あれば

「お前、何の用があつて來た」と誰何「とも角も警察へ來い」と伴ひ行くが常なりき

中山家にても好みて信者を引き寄せるにはあらず、此の道の敎へにつくが爲め、一日の拘留に處せらるゝものあれば不憫なりとて、末には門の扉を堅く締め、家の障子を閉ぢ切りて

『參詣人御斷り申上候』

の張紙を爲すに至りぬ

されど信者の信仰は衰へざりき、信仰の前には及もなく鎌も無く、警察も なく拘留も無し

「切てはお屋敷の土でも踏ませて下され、お助けでござります〳〵」

と泣は殊さら、夜に入りても此聲絕えたること無し

この干渉迫害の中にその年は暮れて、明れば明治十九年なり、美伎子は八十九の春を迎えて、身の肉はや、落ちたれど、心の健康なるは壯き者も及ばぬほどなりき

（三）

陰暦正月十五日の朝、梅笑ひ鶯來鳴きて、春はまだ淺けれど、日南は長閑に陵き南の縁に蓆敷きて、美伎子は孫を相手にして、手鞠歌面白く、小供になりて遊び居たりき

「祖母様、道を止めてじつとしなされや」

まだ廻らぬ舌に斯く心付くる、美伎子が道を説くに由りて加えらるゝ迫害干渉の恐しきを、小供心にも思ひ知るなり、穏かに打集ひて、手鞠玩び居れるこの場も、一たび巡査踏み込めば、落花微塵の悲みを見ん、祖母様お道を止めたまはゞ、一家忽ち平和の春に遭はんと、家の者、親戚の者、打ち寄ることに云ひ喞くを小供の耳に挟み居れるなり

「道が無うては何處へも行かれねぜ、祖母さまは人の心に道を付けるのやぜ、お前方を好い處へ導いて遣るのやぜ」

「私何處へも行きませぬ、斯うして祖母様のお側に居ます、祖母様も沈としてて居なされや」

「沈としては道が立たぬで、お前達も難儀せねばならぬぜ、難儀して身に光りを付けるやぜ」と云ひつゝ前の菓子盆に載せありし金米糖を一つ摘んで「これはお菓子や、このお菓子には角があるけれど、口の中へ入れて置くと、自然に角が取れて行くぜ、角が除れると、好い甘味が出て來るぜ、お前も食べて見るのやぜ」

孫女は小き手に、一個づゝの菓子を受けて

「祖母様有難うござります」

云ふ時、門前に器しき人の聲は聞こえぬ、鎖したる扉をほと〳〵と叩く音聞こえぬ

「心勇講二百人の參詣ぢや、お手振がしたいと云ひます、どうしませう」

家内の者は彼方此方に犇く

此を聞きて、門前へ馳け行きしは、眞之亮なりき、眞之亮は幼きより美伎子の手に養はれて、まだ壯けれど此道の大體を心得ぬ、秀司死歿りたる後は

萬事に代理して、絶えず美伎子の側にありき（後新次郎と改名す、今の天理
教管長は此人なり）

「屋敷の中へは爲らぬ、警察が嚴重しい、參詣人はお斷りぢや」

「お願ひでござります、心勇講の者でござります、親樣へお神樂が獻じたう
ござります、御門をお開け下さりませ」

「切角のお頼みぢやが、警察の命令を無にすることはならぬ、お引き取り下
され」

「私共繰紲を受けても、親樣へ御迷惑は掛けませぬ」

「お前方はまだ警察の遣り方を御存じない、一人でも屋敷の中へ入れば、す
ぐ親樣に繩が掛るで、今日は此まゝお引き取り下され、それが第一の信心で
ござるわの」

一歩にても屋敷の中へ踏み入れば、忽ち繰紲が下るといふ、美伎子を親と
信ずる人々、その詞に背かん要無し

「それでは土を踏むことも協ひませぬか」

「お前方の信仰は神樣がお受けなさる、祖母樣へは私から御披露申して置く」

「仕樣が無い、豆腐屋へ引き取て、お神樂を獻じませう」

講の世話方は、信徒の多くが、切て土にても踏まん、切て親樣のお聲にても
も聞かんと葬くを押へ諭して、門前の旅館豆腐屋へ引き取りき

されど多人數參詣の噂は、風の如く檪本分署へ聞こえぬ

（四）

警部巡査數名の刑事を伴ひて出張す、豆腐屋の樓上樓下は、心勇講の講員
をもて滿たされぬ、一心に祈禱を爲すもの、一心に神樂を奏する者、一家は
鼎の湧くが如し

一巡査は中山家へ入り來る、傲然として

「又法令を無視するな、又參詣人を寄せ集めるな」

この應對に出でたるは眞之亮なり、溫乎春の如き風丰、詞徐かに

「私共で寄せたのではござりませぬ、先方から參つたのでござります」

「爾うでは無い」と一巡査は聲を勵して「寄せるから來るのぢや」

「參詣人へお問合せを願ひます、切て土にても踏ませ呉れて申したに、一圖に謝絶したのでございます」

「行けぬ、警察へ來い」

これ警察員最後の口上なり、彼等の用ゆる慣用手段なり

一たび警察へ來いと云ひ出でたるから、いかに辯解するも聞き入るゝことなきは、今までの仕來に見て明白なり、眞之亮は涙を揮つて、事の次第を美伎子に知らせぬ、美伎子は恨みたる態度も無く、又驚きたる氣色も無し、警部巡査の立ち居れる前へ出で

「私に御用でございますかな」

「お上御用ぢや、速かに同道せ」

「私に悪いことがありますか」

「上官の命で引致する」と一巡査は詞鋭く云ひたるて、美伎子の無邪氣に小供染みたる態度に同情やしたりけん、聲を柔げて「あなたは何も御存じあるまいが、あなたの側に居るものが悪いで、止むを得ず警察へお伴れ申すのぢや、速かにお越しなされ」

「お上の命には從ふが當然でございます、衣服も着かえたうございます」と美伎子は臆したる樣子も見せずさりませ」と云ひかけて立ち上る

その樣の沈着きて、且つ小供染みたるに、併み居る人々、互に暗然と涙を呑む

「お役人方も空腹からうで、溫い御飯をお上げ申すやぜ」

美伎子は我が身に掛ける捕繩を持ち來る人にも、我が身の殺を信仰して、常に親く出入する人にも、同じ眼、同じ心をもて見る、彼女は敵も無く味方も無く一視同仁なり、春の如く美しき情は絶えず紅メレンスの衣服の袖に溢れたりき

美伎子はやがて支度を終る、付添としては數年前より美伎子の側にまめまめしく仕へたる山澤お久從ふ筈なり、一巡査はさつと立ちて

眞之亮も同道せ、同時に取調べる事がある」

眞之亮は忽ち旨を領しぬ、この召喚は眞之亮に取りて一生忘るべからざる喜悦又滿足なりき、是まで屢次祖母の拘留監禁に處せられたるを見聞つゝも、未だ曾て留置所に於ける祖母の心を慰めたることあらず、將た警察署の祖母に對する警察署の待遇如何なるかを見たること無し、われ祖母の孫に生れ、日夕道を聞き、敢に仕へる身を以て、祖母と艱難を共にするは、願ふてもあるまじき事なり、この罪過幾十日の拘留にならんとも、われ自ら獄内の御介抱に當らば、幾分か親戚一門の心を安んずるを得ん

即ち彼は歡びて警官の召に應じぬ

(五)

日は將に暮れんとす、凍れる雲は天一ぱいに漲りて、力なき夕陽の光り、紐き野川の土手に落ち、霜に傷む若葉の色、美伎子の運命を傷むが如く悄れて見えき

警部巡査に取り卷れて、美伎子は足輕く歩む、その後より眞之亮、その後より桝井伊三郎、中田義三郎、悵然と從ひ行く、心勇講及びその他の信徒は警察の威力深く美伎子の身に及ぶべきを慮りて、近くへも寄らず、遠くより見送り行く、彼等悲痛の涙凝りて六出の花とやなりけん、ちら〳〵と降り來るは、何の雲より落つるともなき雪なりき

檢本分署にてはまづ尋問所の板の間に入れられき、春とは云へど寒さ身を切る如し、美伎子はお久從ひて一方の隅に座り、眞之亮は他の一方の片隅に座り、その間に巡査立ちて双方を張番す、桝井中田も同時に拘禁の身となりしが、奥まりたる別房に入れられて、美伎子眞之亮のみ往來に近き板の間に置かれたり、諸人に面を曝させん用意と聞こえき、日悉く暮れたれど、他の信者門弟は、美伎子の身を氣遣ひて、警察分署の周圍を繞りぬ、間には電信柱の陰に隱れて、餘所ながら美伎子の恙なき樣を見るもありき

「親樣、これをお敷きなされませ、お年老お身體が冷えてはなりませぬ」

お久は薄緣を薦めたりき

「私は大事ない、お役人樣冷えはせぬがの」
「お役人樣はお役をお勤めでござりまする、斯樣な物をお敷きなさることは爲りませぬ」
「そなたも冷えるぜ」
「私は關ひませぬ、まづお敷きなされませ」
美伎子は漸くにして薄緣を敷きたりき、やがて洋燈點り、やがて食事を宛はれたれど、美伎子は例の如く手にだも取らざりき
「眞之亮々々々」と美伎子は暫時して呼ぶ
「はい」と眞之亮は彼方に座りたるまゝ「御用でござりまするか」
「此方へお來で」
「其方へは行けません」
「何とへ」と片手を耳に翳しつゝ問ひ返しぬ、美伎子はやゝ耳疎かりき
「私、其方へは參りません」
「何故やね」

「此處は警察でござります」
「爾うか」とその身が囚人となりしに心附かぬが如く「警察であつたかな」
「祖母さま、お食事を爲されませ」
「不淨な物ぢやで、私は欲しうないぜ」
「空腹いことござりませぬか」
「私は道で生きるぜ、不淨の辨當では生きぬぜ」
その聲凛として磬を打つが如し
「もうお寢みなされませ、夜も更けるやうでござります」
「爾うかえ、皆も寢むかえ」
留置所に在ること我家に在るが如し、美伎子は上衣を一枚脫ぎて上より被り、この身の穿き居たる麻裏草履に、お久の帶を卷きて枕に替え、氷の如く冷たき薄緣の上に寢る、然も平生に異る事なく安眠、平生に異る事なく熟睡、朝は六時の時計を聞きて起き出で、平生の如く座を正して座る
眞之亮はその夜疑ひ晴れて放たれき

（六）

東の天ほの〳〵白みて、鳥の鳴く音寒げに聞こゆ、洋燈は眠げに瞬きし、見張せる巡査はうつ〳〵と眠りに入る、美伎子は徐に立ち上りて、遙かに東の方を伏拝み、次に洋燈を吹き消しきし

「これ〳〵、何をする」

巡査は漸く目覚めたるなり、目覚めて美伎子を言ひ懲らさんとするなり、美伎子は莞爾して

「お日様上らせらるゝに、洋燈點し置くは勿體無うございますると、只今消してお上げ申したのでございます」

巡査は無言、暫くして又眠りに入る、此の尋問所は近く道路に接したるが爲め、道行く人の話聲、物賣る行商人の聲々、宛ら手に取る如く聞こゆ

「お久々々〳〵」と美伎子は呼びかけ、彼は何を賣り歩くのぢやへ」

お久は耳を欹てゝ

「蜜柑屋らしうございます」

「蜜柑を賣るのやね、一個買ふてたもらぬか」

「親様、何を仰せなされます、こゝは警察でございます、物を買ふことは能きませぬ」

「爾うかえ」とさも失望したるさま

「蜜柑買ふて何うなされます」

「お役人様、座睡してお在やで、退屈やろ、一個お上げ申したう思ふわの」

美伎子の慈悲心は我が身を監視する巡査の上にまで及ぶ、彼女の一面は無垢にして子供の如く、一面は清浄にして神の如し

彼女は斯くの如くにして、苦寒膚に砭する如き尋問所の中に、十二日間を止め置かれぬ、犯罪の事情は總て單純明白なれば、取調べなど有る筈無し、只美伎子を困らすべく、この不可解の處置を爲したるなり

然もこの結果、十二日間の拘留に處する旨を云ひ渡されて、美伎子は留置

所内の人となりぬ、彼女は何處に置かるゝも、家に在ると同一なりき、寢る時、起きる時、朝の勤行、夕の勤行、一日も懈怠無かりき

前後二十日間、一粒の飯だも食はざりき、付添のお久心配して

「切てお茶漬にでも爲されませ、切て一つだけ召し上りませ、お身體に障つては爲りませぬ」と氣を付けぬ

「これは節やぜ、節から芽が出るぜ、御飯は食ひでも清淨なお水があるぜ、お水に神さまがお宿りやぜ」

美伎子は日ごと數椀の清水を喫むばかりなり

月の二十六日は、美伎子に十柱の神憑らせたる紀念日なれば、中山家にても信徒の集會所にても、月次會を執行ふ、この都度參詣の信者雲の如く集るが例なり

これ然しながら美伎子家にある爲めならん、美伎子だに家にあらずば、信徒門弟の參詣もなき筈なり、美伎子を留置所に止め置け、との主意に由りて美伎子に十二日間の拘留を科したるなりき

されど信者の參詣は例に異ることなかりき、美伎子家にあらずとも、美伎子の數へ滅しなき間、參詣の信者絶ゆる事無きが當然なり

二十日間の絶食も、美伎子の心身に何の障害を見することなく、放免の日は多くの信者に迎えられて、梅咲く野邊を步輕く家に歸る

第拾參章

（二）

美伎子は十八年以前、早く我が身最後の運命を自覺して「正月二十六日、人數そろへて勤めこしらへ」と豫言しぬ

十九年陰暦十二月八日の夕方なりき、美伎子は浴室より出づると共に、よろよろと乒乓きて、緣端に倒れんとしぬ、付添ひたるお久は慌てゝ抱きとめ「どう爲されたのでございます、お障害があるのではございませぬか」と氣遣しげに問ひ掛けぬ、美伎子はお久の手に縋りながら

「世界の動く前兆やぜ、これも節やぜ」

やがて徐に居間へ入りしが、格別の事もなくその日は過ぎぬ、翌日は心地勝れず、顏の色例ならず見えたるに、人々は又慰さて、何か御意に背きたる事あるか、御望み協はせられぬ事ある時は、必ず御身體に障害を見さするが例なり、兎も角も伺ひ見んとて、眞之亮を先

にせる門弟達は、恐る〳〵前へ出でぬ、當時門弟信者の美伎子に對するは、宛ら神に對すると同じ態度なりき

「今日のお障り、何の事情でござりまするか」

美伎子は儼かに口を開きぬ、平生とは異りて儼正なる口氣なりき

「よく問ふた、さア時は逼つたぜ、難儀一條は目前に現はれたぜ、お前達心を定めてよく思案するやぜ、一時の難儀は何んな事でも忍耐するやぜ、四十九年の長の月日をさま〴〵に苦勞して、今日まで經て來た苦しさを思ひ、時世に應ずる行ひをするのやぜ」

美伎子の云ふ所意味を十分に解すること能はざれど、日頃好ませたまふ神樂勤めを捧げ參らせば、或は多少御氣鬱の散ずることあらんも知れじと、門の扉堅く閉め切りて音樂太鼓の音勇ましく、神樂勤を行ひき

これに心解けたるらしく、美伎子はやゝ氣色好く見えしが、超えて十一日再び例なき樣となりき、眞之亮及び門弟一同枕邊へ進み出る

「今日のお障害、何故でござりまするな」

美伎子はむく〳〵起き上りて

「お前達段々說き聞かせたことまだ分らぬか、さア今の時はうか〳〵と日を送るべきでない、心を定めてよく思案せ、四十九年の間、敎の道、道の理を よく說き聞かせたに、お前達まだ分らぬか、さア時は逼つたぜ、恐しい時が逼つたぜ」

聲は朗かに、平生と異る樣もなかりき

人々は又神樂勤めして、美伎子の心を慰めぬ、神樂勤めの太鼓の音勇しく聞こゆる間、美伎子の容體は佳良なりき

斯くして不例、斯くして神樂勤め、斯くして又輕快を覺ゆる事幾度、その月十八日は心地甚しく惡かりき、一門弟は恐る〳〵問ふ

「神樣の御利益、如何なる時に現はれるものでござります」

美伎子はきつとして答へぬ

「實があれば實が有る、實が無ければ實が無い」

一門弟は又續いて問ふ

「天理大神は如何やうの實體で在らせられまするな」

「應へといふ字が無ければならぬぜ、有りといへば有り、無いと云へば無ひぜ、利益の現はれるがやがて神やぜ、理が卽ち神やぜ」

詞の足らぬ如き中に深き意あり、一門弟は更に進む

「親樣御容體優れさせ給はぬゆゑ、皆の者心配致し居りまする、警察の干渉嚴しければ、夜な〳〵神樂勤めを執行ひ居りますれど、それでは不足の樣にも見えまするで、以來は晝の神樂をお勤め申すことに致しませうか」

美伎子はそれに答へ無く、黒瞳勝に光り輝く目を開きて

「時は來たぜ、もう目前に迫つて居るぜ、將來の爲一言云ひ殘す、陰氣の心を去つて陽氣に移るやぜ、命を捧げて世界の者を助けるやぜ、何事も心配は要らぬ、うしろには神がお控えやぜ、四十九年來說き聞かせたこと忘れては ならぬぜ、用意は整ふた、人數は定つた、身體は神へお返し申しても、魂は後に殘るぜ、後に殘る魂は神と共に不滅やぜ」

その聲秋風の落葉を卷くが如くなりき、大將軍の士卒に號令を傳うる如く

(二)

斯る中にその年は暮れて、明れば明治二十年、美伎子は九十の高齡なりき、陰曆正月二十五日、庭の砌に雪は解けて、梅の香り何處ともなく傳ひ來れど、美伎子病の床にあれば、中山家は黒き雲に包まれぬ、おらず、中山家のみにはあらで、三島庄屋敷一帶の地、悉く黒き雲に包まれぬ

「さア今といふ今の時が來たぜ、承知でおらう喃」

その夜美伎子は突然と斯く云ひぬ、枕邊より次の間かけて、肅然と詰め居たる門弟衆は、詞の意味を解しかねて

「今といふ今、何の時が參つたでござります」

「今といふ今が來た、神樂勤めの人數を揃へるやぜ」

美伎子より進みて、神樂勤めを催促したることなければ、人々不審の眉を

「お詞ではござりまするが、此間から又警察の干渉が厳しいのでござりまして、もしお咎めに逢ふて、萬一の事でござりましては、御病中のお身を留置所へお入れ申すこと爲りませぬで、今日ばかりは御猶豫を願ひます」

年久しく美伎子に親炙せる門弟信徒も、美伎子の深意を知らざりき、美伎子が「神樂勤めの人數を揃へよ」と云ひ「今といふ今が來た」と云ふを、一圖に神樂を奏すべき催促なりと思ひぬ、美伎子は自若たり、世にも壯厳なる聲をもて

「如何なる處にても尋ねず、分りなくば知らそ、しつかりと聞き分け、これ能う聞き分け、も早や二度と尋ぬること爲らぬぜ、前以て傳へてあるぜ、難しいことを云ひ掛ける、一致心になつて思案せ、一時のところ何ういふ事情か聞き分け、今一時の事に運んで難しいこと何も無い、難しいといふは、眞の治定ぢや、眞の信仰ぢや、四十九年以前説くべき事は説いた、聞かすべき事は聞かせた、何も分らんことはあるまい、世界々々、さア應へる處、それ應へる處の事情、四十九年以前より誠といふ思案があるぜ、實といふ處がある

ぜ、押ての事情、分りか、有るのか、無いのか、分らんではあるまい、元々よりの道すがら、さア今一時、應へる處どうでも斯うでも押切る事情可けぬ、たゞ一時、爲らぬ〳〵、一寸今といふ、前々の道を運ぶも一時、さア一度の話を聞いて、きつと定め行はねばならん、分岐の道がある、一つ道も、いかなる處も聞き分けて、只止まるのは可けぬ、順序の道々、安心が爲きぬとあるなら、まづ今の處、それ〳〵今の處、談示に談示といふ處、さア今と云ふたら、今はぬきさし爲らぬで承知か、さア事情が無くては一時定めが爲き難ない、さア一時、今それ〳〵、これ三名の處できつと定め置かねばならん、何時願ふ處、その處へまかせ置く、必ず忘れぬやうにせよ、さア一時、今から今といふ心、三名の心、しつかりと心合せ返答せよ」（この一節美伎子最後の諭をそのまゝに筆記ある門弟の手記中より抄出す）言語簡古にして解し難き處あり、美伎子が門弟に對する諭、いつもこれの口吻ならしならん、いかなる迫害威壓にも恐れず、自信を貫徹せんとする九十の老媼、現世を辭せんとする刹那、繰り返し〳〵門弟を諭し説くさま、目前に瞻るが如し

この詞の中、門弟は只平伏して、誰一人頭を擡ぐるもの無し、美伎子は三軍を叱咤する大將軍の如き意氣、語を鋭うして

「さア月日ありて此世界、世界ありてそれ〴〵あり、それ〴〵ありて身の内あり、身の内ありて律がある、律がありても心定めが第一、さア實があれば實があるで、さア實といふ實は知るまいな、實といふは火水風、さア實を買ふのやぜ、價を實を買ふのやぜ」

胡麻鹽の鬢髮風もなきに搖ぎて、火の如き信念美伎子の眉の間に漲ぎる

（三）

一夜は人々一睡もせず、堅く門戸を鎖め切りて、懸命に神樂を奏しぬ

神樂の響きを慰安にして、すや〳〵眠りに就く美伎子が、此夜はさせる樣も無く、時々思ひ出したるやうに

「人數揃ふたか、今といふ今やで、勤めこしらへ急き込むぜ」と催促す

人々は尚美伎子の詞を解し得ざりき、美伎子運命の迫るを知らざりき

二十五日の夜も明けんとす、甘露臺を取り卷きて、美伎子の平癒を祈り居れる神樂の音は遠く近く嚴肅に且つ正しく聞こえ來る、幾多の門弟信徒は美伎子の枕頭に侍座して、徐に容體を見守り居たりき

「さア扉を開いて、世界を直に踏み馴らさうか、扉を鎖して世界を一列に踏みならさうか、心定めてしつかりと返答せ」

門弟信徒は又その意氣を解すること能はざりき、扉を開いて世界を踏み馴らすべきか、扉を鎖ぢて世界を踏み馴らすべきか、この二ヶ條の中何れかに確答せざるべからず

一同は一室に退きて、この評議とり〴〵なりき

「親樣の思召しはよく分らぬが、開くと閉るとの兩樣ぢや、二つに一つを定めるぢや」とその中の一人は云ふ

「是までもお諭しは平易で、誰の耳にもよく分るが、未來の事を仰せなさる時は、意味が深い爲か、分らぬことが度々あつた、今度も未來のお諭しと見える、然し鎖るといふは面白くないで、開く方をお願ひ申さうでないか」

中の一人は斯く云ひぬ、鎖るといふよりは開くといふ方、恐らく神意に協ふならんとの說多數を占めて、遂にこれに一決す、由て一同は再び美伎子の前へ出でゝ、疊に額を摩り付けつゝ

「恐れながら扉を開いて、世界一列のお助けを願ひまする」と云ひ出でぬ

美伎子は淋しき目ににつと笑ひて、手にせる扇をぱつと開き

「神意に悃ふ、然し皆の思ひとちがふぜ」

これ美伎子が最後の詞なりき

天は明けたれど、美伎子の容體は異らざりき、今は警察の干渉も恐るべきにあらず、親樣の御意を奉じて、助け一條に志せ、御神樂を勤め行ひて、神の御意を安め奉れと、幾多の信者甘露臺の上に昇り、神樂歌勇ましく、手振の樂き面白く、且つ歌ひ且つ奏づる

寅の刻より起りて、未の刻（午後二時）に勤めを終る時、美伎子は紅メリンスの蒲團の上に横はりしまゝ眠るが如く息絕えき

眞之丞を始め門弟信徒、亡骸に抱きつき泣き悲みたれど甲斐なき、やがて遺骸を庄屋敷の北、豐田山の上に葬る、誌して「眞道彌廣言知女命」といふ

美伎子逝きて二十餘年、日本領土の中はおろか、海外にも道廣まりて、信者の數五百餘萬人と註せらる、まことに我が邦唯一の大家族なり、美伎子逝きて道死せず、美伎子の魂天に昇りて、教へ隈なく世界の中に敷かる

布留の川は淸くこの女丈夫の魂と長く流れ、豐田山の翠は濃かくこの偉人の靈を守りて榮えん

天理教祖 中山美伎子（終）

明治四十三年九月二十日印刷
明治四十三年九月廿三日發行

正價九拾錢

著作者　碧瑠璃園

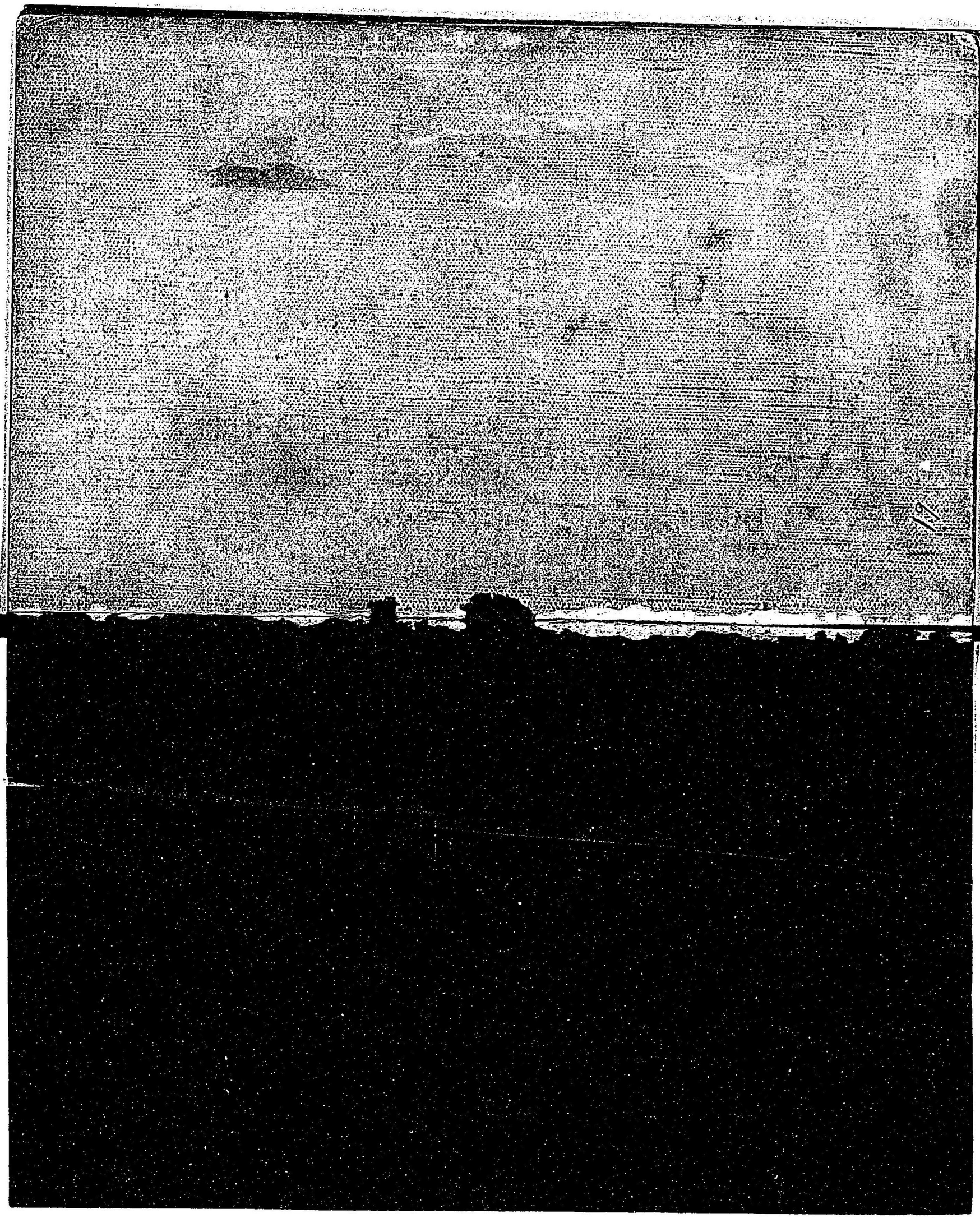
發行者　大阪市西區靱町五十五番地　武田彌富久

發行兼印刷者　名古屋市南吳服町八十六番地　與良松三郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　大阪市西區靱町　育文館
名古屋市南吳服町　與風書院

239
65



329
65

329
65

014482-000-8

329-65

中山美伎子（天理教祖）

碧瑠璃園／著

M43

ABB-0860